

# 幼 兒 教 育

第 三 十 八 卷 七 月 號 第 七 號



東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 內  
日 本 幼 稚 園 協 會

廣島文理科  
大學教授

文學博士久保良英著

菊判洋綴紙數三百頁  
定價金二圓八十錢

送斜廿一錢

新刊

# 兒童の精神構造と指導

本書は心理學上より兒童の精神構造を科學的に解剖し、體係を立て以て兒童教養の根本義を確立せるものである。兒童の教養は次期の國家の消長を決するものであるが、特に現今我國は非常の時局に立ち何事にも國民總和の力を以て當るべきの邦である。著者はこの大に感ずる所ありて、世の教育家父兄の爲に特に本書を著したのである。先生は我邦心理學界の泰斗で、本書は其深奥なる學問と豐富なる經驗と四完全なる融合である。左に其大綱を擧ぐれば……一幼兒の精神構造 二玩具の選び方 三言語と文字の交友についての注意 五問題の子供の導き方 六家庭に於ける知育 七美の情操陶冶 八道德教育 九宗教教育……一般教育家は勿論一般識者の必讀を望む。

東京高等師範學校教授

文學博士

小野島右左雄著

# 心理學要説

菊判紙數四百頁  
定價金二圓十五錢  
送料十二錢

教育の基礎となる  
新しい心理學説

文檢要書

心理學の問題は嘗ての機械説より生氣説、準機械説等幾變遷を経てゐるが、體制に於ては今や其全面に渉り百八十度の大回轉を示してゐる。之は人間科學の諸領域に當つて著大なる進歩と新らしい分野の開拓とを意味するものである。斯様な時期に當つて、傍諸家の説に於て單なる紹介や學説の羅列をさけ、専ら見方を致へ考へ論を以て透し、傍諸家の説に於て單なる一方其内省よりして東洋思想の色彩も又濃厚なる教育者特此の心理學の成果に於て又一般知識人の必讀を俟つものである。

振替電話 東京三三三 八三二 四二五

店書館文中

發行所 東京市牛込區 四七

最新刊

# 幼兒心理學

恩賜財團愛育會  
兒童教養相談所主任

山下俊郎著

四六判美裝四三〇頁  
定價 貳圓五拾錢  
送料 二十二錢

人の一生は幼兒時代に於て定まる。これは現代兒童心理學の教へる嚴然たる事實だ。幼兒時代を惡しく送つたものは一生を不愉快に過さねばならない。我兒の幼時を大切にすることは彼の一生を光輝あらしめることである。本書はかかる立場に立つて現代兒童研究の成果を育兒の實際に適用した稀なる良書である。學理をかほどまで平易化し、個々の育兒活動をかほどまでに合理的に書き示した書物は外にない。眞に哺育の聖書。

### 主要項目

序論 乳兒の心理 新生兒・感覺生活・智能の芽生え・乳兒の心理的特徴 幼兒の心理 運動能力の發達・言葉の發達・空間、時間、數の觀念・記憶と注意・思考・創作・情緒生活・好奇心と興味・社會性・遊び・習慣の持つ意義・道德的發達 幼時の精神検査 精神検査の概観・現行の幼兒智能検査法・検査の結果の表はし方とその意味・精神検査に對する態度 結語 就學可能性の問題 附録文獻

文學士 桂 廣介著

## 心理學序說

菊洲布製四一〇頁 定價參圓五拾錢 送料二十二錢

世に心理學の概説書は多い。然しこの書ほど終始新しい精神に貫かれた概論は見當らない。本書には舊心理學の概念的な思辨的な死せる精神研究の代りに具體的な即事的な生きた精神把握がある。從來の心理學に依つて與へられる事の少いのを嘆いた人々は今や本書が人間精神の全面を心惜い許りに説明し盡して居ることに喜びを感じるだらう。

電話九段一四三五一(4)  
振替東京六五五六番

巖松堂書店

東京市神田區  
神保町二ノ

# 第九回夏季保育講習會

我が講習も既に九回を數ふるに至りました。何時も盛況を見る事保育界の爲め又主催者として大いに力強く且感謝する所であります。今年の第九回講習は殊に時勢に鑑みて其趣く所を考へ少しでも我が保育界に一新企畫を作り國家の爲め、幼児の爲めに盡したい存念で御座居ます事を御了承下さい。

一、期 日 七月廿七日より七月三十一日迄五日間

二、時 間 午前八時ヨリ十二時  
午後一時ヨリ五時

## 三、科目と講師

1、幼稚園に於ける談話と其の實際 (六時間)

東京女子高等師範學校教授 倉橋惣三先生

東京昭和保姆養成所顧問講師

先生は我國保育界唯一の指導者として既に周知せらるゝ、所其深遠なる學理に基き極めて平易に講述して下さい故に必ずや大いに得る所ある事を確信して居ります。

2、保育の實際を中心としたる幼児の心理 (六時間)

東京帝國大學助教 青木誠四郎先生

先生は幼児の心理については權威者であり「問題の子供」については有名な方であります。こゝには幼児の日常生活の上には表はれ来る種々の相を捕へて之が本質を闡明にし其種類を述べ其取扱方處置の方法を述べていただきます。ケンカとか運動とか性格の異常なるものとか其他多くの表れを取り又精神鍛練について或は絶対首感教育とかこれにも心理的に説明を與へらるゝ以上最も新らしきものを與へられ保姆の苦惱を水解せしむる爲めに教育さるゝが故によくノートに收められ度尙常に保姆諸姉が疑問とせらるゝ、幼児生活の問題あらば七月十日迄に本會宛提出あらば自他を益する事大なるべし

3、幼児の向上と歐米社會施設視察談 (四時間)

醫學博士 廣瀨興先生

先生は多年東京市の兒童保護課長として令名あり常に愛育會講師として各地の講演により幼児の體位向上と託兒所保育のため盡されて居ります。最近歐米を視察し歸朝せられたるを以て本會に聘し大いに得る所ありと信ず

4、幼児に與ふる唱歌の唱ひ方 (六時間)

東京音樂學校教官 梁田貞先生

5、幼稚園に於ける童話劇の取扱方 (二時間)

東京高等音樂學院教授 岡本敏明先生

國歌祝祭日唱歌愛國行進曲等の標準歌法、幼稚園に適切なる歌曲遊戯に使用する新唱歌の指導

玉川學院教授

# 6、ピアノ・オルガンの指導

東京高等音楽學院教授 同 敬 官 松 土 川 正 浩 先生 先生

# 7、律動遊戲及新唱歌遊戲

(十四時間) (幼稚園託兒所低學年用)

東京昭和保姆養成所長 瑞穂幼稚園長 土 川 五 郎 先生

國歌祝祭日唱歌愛國行進曲の伴奏の弾き方  
會員各自希望の曲(幼稚園唱歌の伴奏律動及新唱歌遊戲其他必要なる曲)を練習用意せられたるものに限り指導す  
體育を主眼とし幼児の身體の發達に重きを置き性情の涵養に資する藝術を副とし生理と心理とに合致せる遊戲 然もステーション向  
きを排除し全くごも自身を樂しましむる遊戲 本年新作のもの二十種の外律動遊戲を順序正しく正確に教授し更に既作にして經  
驗上幼児の好んでなすもの、内より數種を擇みて指導す  
◎手技 當養成所の創作にかゝる手技の發表と説明を適當の時間に行ひます

# 四、五、六、区 定區 割引乗車券

甲之部 1、2、3、4、5、6、7  
乙之部 4、5、6、7  
各三百名  
五割引往復券

會費を添へてお申の方へお送りいたします。七月二十日迄に申込になりませんと間に合ひませぬ。振替は到着迄一週間かゝりま  
すから七月十日迄に願ひます。切符購入期間は七月十三日より八月一日迄通用期間は八月十四日迄  
市内及近郊から省線でお通ひの方には鐵道規則改正の爲め御氣の毒ながら五割引は使へませぬ。  
◇五割引乗車に關する注意◇  
鐵道割引の規定が改正されました。五割引券の使用は五十キロ以上の旅客に限られました。即ち五十キロか夫れ以上の賃金を拂ふ客  
北線は白岡、常磐線は取手房總線は四ツ街道と蘇我より使用されるので大井町驛を基點とすると、西の方は二キロ四分減じ北の  
方は二キロ四分を加へて計算して五十キロになればよいのです。

# 七、會

瑞穂幼稚園 東京市品川區大井原町五、二〇八

# 八、會

甲之部 參圓 乙之部 參圓 兼修 五圓  
省線大井町驛下車城南バスにて原又は水神前下車

# 九、宿

本校寄宿舎を充用 一泊二食壹圓參拾錢  
收容人員に限りあり必ず前以てお申込を乞ふ。宿舎さるゝ方は敷布御持參下さい

# 主 催 東京昭和保姆養成所

責任者 土 川 五 郎

東京市品川區大井原町五二〇八  
電話大森四二二〇番 振替東京六九二一四番

昭和十三年六月

# 注 意

1、一度納付せられた會費は理由によらず御返しいたしません。2、振替は一週間後にこちらに到着しますか  
ら急ぎの方は小爲替の方が宜敷いです。振替は東京六九二一四番土川五郎です

# 第拾回保育夏期講習會

主催 佛教保育協會

後援 佛教各宗々務所

東京市大塚市民館

期日 昭和十三年七月二十七日より三十一日まで(毎日午前八時より午後四時まで)

會場 東京市小石川區大塚辻町 東京大塚市民館(舊稱大塚市民館) (市電、市バス 大塚辻町下車約一丁) (省線 大塚驛下車約四丁)

## 一、講師及科目

### 一、信念に生きよ (二時間)

鶴見高等女學校長  
ドクトル、オプ、フィロソフイー

中根環堂氏

生甲斐ある生活をせんせば先づ信念に生きることが大切であります。まして平素第二の國民養成に當つておられる保母さんとしては最も心得ねばならぬこと、信じます。大本山總持寺經營で神奈川縣下唯一の鶴見高女に於て平素千七百餘名の生徒の薫育に當つておられ帝都女子教育界の權威であらるゝ先生が特に御出講されて懇切に御説示されることになつております。

### 二、時局と保育 (二時間)

東洋大學教授  
本會保母養成所教頭

關寛之氏

### 三、保母としての一般衛生と幼児の榮養 (四時間)

醫學博士 竹内茂代女史

昨年の講習には幼児の救急法縫帶法に就て御指導されましたが本年は保母として心得べき一般衛生特に結核等幼児の榮養に就て御教示を頂くことになつてゐます。

### 四、童畫の鑑賞と指導 (四時間)

武井武雄氏

幼児の畫は子供の生活の偽らざる表現であります。そしてその畫の中から子供の本来の姿を發見することが出来るのであります。この信念を以て平素童畫を研究し發表せられておる先生が本年は特に御出講を頂いて親しく御指導を受くることになつております。

### 五、唱歌の教へ方、導き方 (四時間)

四家文子女史

平素ラヂオやレコードでおなじみの先生が特に御出席下さいまして幼児に對する唱歌指導法發聲法等を御教示されます

### 六、遊戯指導 (十三時間)

(一) 幼兒遊戯 (二般遊戯) (九時間) 檜 舞踊研究所長 檜 健 次氏

昨年から約一ヶ年歐米を視察されて最近歸朝され平素幼兒の新らしき遊戯の研究指導等に専念されつゝある先生を煩はして特に新作振付につき御指導を受くることゝなつております

(二) 幼兒遊戯(基本練習及讚佛歌) (四時間)

タンダバツハ舞踊研究所講師

河 地 琢 哉氏

### 七、新手法教材 (五時間)

目下北支の聖戰に出征されつゝある賀來琢磨先生の高弟としてそのお留守中生徒の指導に當られつゝ研究せられてゐる先生より遊戯の基本練習及讚佛歌を主題とした遊戯の御教示を受くることゝなつております  
生活主義保育に於ける手技の意義使命を充分に發揮し眞の幼兒生活の中に生きた手技的題材につき工夫創作されたものにつき發表されます  
本會保姆養成所講師 卜 部 た み 女史

講 習 員 金 參 圓 也

一、申 込 所 東京市芝區新堀町三十五番地 曹洞宗務院社會課内 佛教保育協會夏期講習會事務所

一、申 込 期 七月二十五日迄(但し定員超過の場合には期日前に〆切することがあるかも知れません)

一、宿 泊 一泊二食付金壹圓貳拾錢にて會場附近の音羽洋裁女學院寄宿舎をお世話いたします

一、鐵 道 割 引 宿泊希望の方は申込書に御記入の上講習前日に音羽幼稚園(護國寺境内)に御到着下さい  
本講習に参加せられる方に限り全国各地より鐵道運賃往復參割引券を差上げます  
(但し片道五十料以上に有効)

一、見 證 書 八月一日東京市内社會事業施設、保育施設を見學いたします  
講習修了者には修了證書を授與いたします  
申込書用紙及詳細御不明の場合は左記へ照會下さい

東京市芝區新堀町三十五番地 曹洞宗務院社會課内

佛教保育協會 夏期講習會事務所 電話三田 三、七五〇番 振替東京 七八、六六七番

奈街三郎原作 前島とも書

第一輯

# タンポポの三つの種子

版 (38×26) cm 大  
一組十六枚  
寫真入り説明付  
美麗四色刷  
ボール箱入り

幼稚園・託児所の幼児たちのために、明るい、健康な、ためになる紙芝居を！

紙芝居、紙芝居とせがむ幼児たちのために、研究会が苦心研究の幼児紙芝居を御奨めいたします。明るい、健康な繪、正しい内容、幼児童話作家、童畫家、保姆協力の作品です。風に飛ばされたタンポポの三つの種子が、農家の屋根や、お邸の庭や、幼稚園の隅に降されます。自然觀察を通して昂められて行く幼児の知性の糧に好箇の作品です。

第 四 輯	第 三 輯	第 二 輯
榎本楠郎作 前島とも書	塚原健二郎作 木俣武畫	川崎大治作 宇田川種治畫
仲 な ほ り	迷子になつたボン	お猿さんの赤い毯

各輯定價壹圓(送料十四錢)  
四輯前金申込特價三圓六拾錢

## 保育問題研究

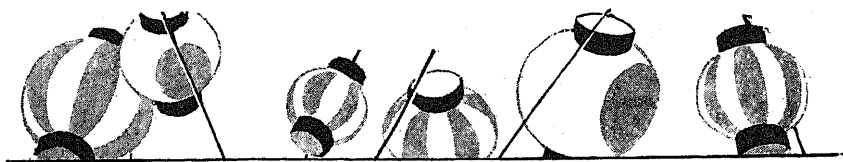
月刊 五十錢

研究室の學者と児童文化關係の専門家と子供の實際保育に當る保姆とが、幼稚園・託児所といふ幼児の社會的生活場面に起る諸問題の解決・研究のため結集してゐる眞摯な團體「保育問題研究会」の機關誌です。保姆・母親に、子供の生活を見るべく深い目を與へ、子供等の知性を磨き進しい生活力を育んでやる爲の力をつけることを目的としてゐます。

保 育 問 題 研 究 會

東京・麹町・法政大學  
兒童研究會所內





第三十八卷 幼 兒 教 育 第 七 號

—(次 目)—

口 繪

卷 頭(つゆばれ)

倉橋惣三(一)

幼兒の夏季衛生

竹内薫兵(二)

紫外線の話

林 太 郎(八)

水棲昆蟲記

久米又三(五)

子供・子供・子供

内山憲堂(三)

童心慰問の旅

山内勇仙(元)

氏原銀女史を悼む

倉橋惣三(四)

摘草ミ子供

氏 原 銀(六)

子ぎもこリズム

清水光子(七)

入 選 童 話

河童の瓶

田中まり子(四)

でんく蟲のお話

山本ゆき子(四)

狸さお團子

石堂トヨ子(五)

雪のトンネル

桂本美枝子(五)

御紹介

(三)

ハイデュー(ヨハンナ・スゼリ原作)

津田芳雄譯(空)

日本幼稚園協會編

# 幼稚園談話集 (三版)

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

# 系統的保育案の實際 (四版)

# 幼兒の教育 (月刊)

○近刊豫告 七月下旬發刊豫定、

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

# 觀察の實際

日本幼稚園協會編

# 幼稚園新唱歌

倉橋惣三編

# 新體幼稚園唱歌

發行所

# 日本幼稚園協會

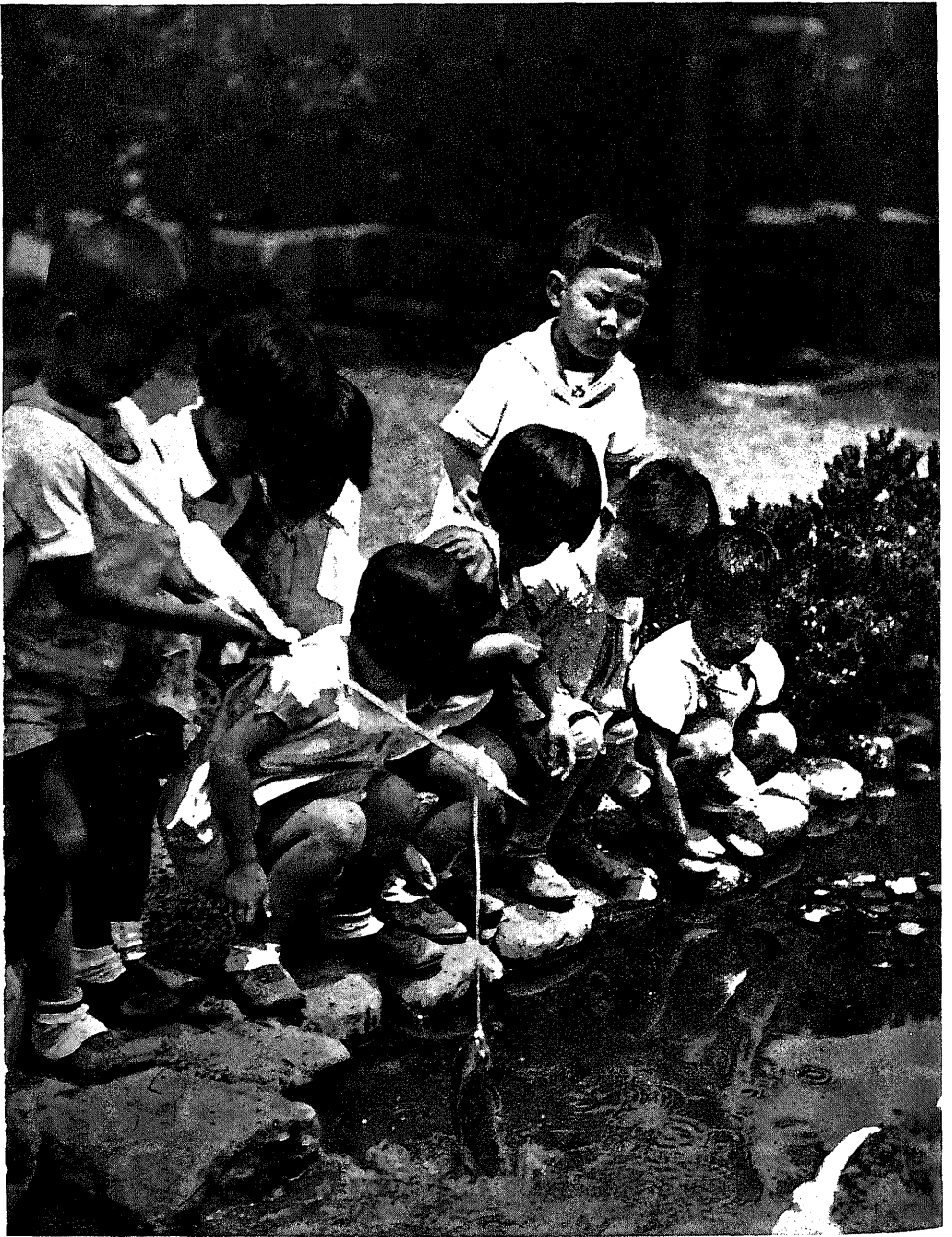
○定價及郵税を添へ本會宛直接御註文下さい

菊版三五〇頁 定價金壹圓五拾錢  
送料 市内 金 六 錢  
地方・北海道・臺灣 金 拾 五 錢  
樺太・朝鮮・滿洲 金 拾 五 錢

定價金 壹 圓  
送料金 六 錢

一ヶ月 金參拾五錢 送料金一錢  
一ヶ年 金四圓貳拾錢 送料 共

東京市小石川區大塚町三五番地  
東京女子高等師範學校附屬幼稚園内  
振替東京一七二六六番



或  
る  
日

# 幼 児 の 教 育

昭 和 三 十 年 七 月

つゆばれ

いつまでたつても、なぜいつまでもあんなだらう。暗い子、じめ／＼してさつぱりしない子、その陰鬱さが、入園の當初から氣にかゝつて、早くなんまかしてやりたいと思つても、そう思つて側へよればよる程、雲が濃くなるやうな子。そう思つては悪いが、子ぎもらしくないところか、こつちの氣持ちをも、こつち長くなつてはいやにさせる子。正直にいへばこの頃少々うんざりさせられてゐた子。——その子がけふは、なんまかいふ明るいところか、さつぱりさ晴々しいところか、こつちからは、いつもの癖で一才隔てを置いてゐたのを、むかふから雲を破つて笑みかけて来る。その急な變化に、いままでのこまはすつかり忘れて、こつちもけふは、爽かな目でその子を見なほし、胸をあけて大きないきを吸ふ。いくら長くぬれてゐたつて心配することはない。つゆばれはきつ／＼の子にも来る。

(倉橋惣三)

# 幼児の夏季衛生

竹 内 薫 兵

夏は暑い。暑いから萬事を放擲して家の中にゴロ／＼して居るために夏さいふ時期があるであらうか？ 否。子供のためには夏こそ身體の健康増進の時期であります。而かもその健康法は鍛錬による一途のために、夏さいふ特別の季節が天から與へられて居るご見られます。一年四季、何も夏に限つた事はないやうに思はれるかも知れませんが、夏以外の季節は、思ひ切つて素裸にして、存分に外氣に觸れ、水に飛び込むさいふやうな事は出来ない。即ち身體の鍛錬にはほかの季節は不向きなのであります。

その折角の夏であります。子供の健康のためのこの好季節を無駄にのらりくらりご過ごさせて終はないやうに、親達や周圍の者は心掛けてやるべきであります。そしてよい事には、この季節に充分鍛錬して置きます。この夏だけその子供は健康であるばかりでなく、来る秋も、冬もすつと丈夫で通せるさいふ、所謂健康の蓄積が出来ることでもあります。

さて鍛錬的健康法を行ふに云つても、何に云つても幼稚園へ通ふ位の年齢のお子様であります。荒つばい事をしてこれが鍛錬だなきと思ひ込むのは飛んだ勘違ひです。よく子供の年齢相應を考へて、程々にすべきは申すまでもありません。そこで通則的には、夏の幼児の生活は身體鍛錬であつて、之を行ふには、「規則正シカレ」「過勞ヲ避ケヨ」の「モットー」を忘れないやうにしていただきたいのであります。然らば實際に當つて、どんな具合に夏を過ごさせたらよろしいかと申しま

すこ、實際的方面としては『薄着』と『節食』の二つに歸着いたします。薄着を申しますと、單に着る衣服を薄くするのことも思へますが、それは狹義の考へで、もつと押し廣めて、極端に衣服の薄いところの裸體生活をさせたいのであります。その裸體からこそ更に押し進めて空氣、水、日光に思ふ存分觸れさせるところまで行けるのであります。『節食』の方は、なるべく飲食物を注意して食べさせる事でありますが、その「注意」が問題なのであります。無闇に少食させることや、煮た物ばかり食べさせることは節食ではありません。

以上は身體の鍛錬に就て述べたのでありますが、夏の衛生は身體のみに注目するは大間違で、身體と同時に精神方面にも鍛錬を行はなければ駄目であります。さう駄目になるかを申しますと、神經衰弱のやうな病氣になつて終ふことがあるからであります。

かやうな趣旨の下に幼児の夏は過ごすべきではありませんが、これは必ずしも轉地を必要といたしません。暑い季節に涼しい海や山へ出掛けるのは悪いことではない。むしろ望ましいことも云へますが、轉地を絶對的必要を考へるのは愚です。家庭其まゝで相當の事は出來得るものであります。

○

各論に入つて『節食』の事から申します。

節食を申しても單に食物を控へ目にする意味でない事は前に述べた通りです。こゝには總じて「飲食物を注意せよ」とこの意味に心得ていただきたい。

夏、渴を覺えるのは天然自然の要求ですから飲み物を控へさせるのはよろしくありません。寧ろ或る程度までは飲ませたがよいのであります。水道の水(殊に東京の水道は煮沸しないでそのまゝ呑んで安全です。しかし、その他少しでも

不安心な水は煮沸したものでなければ危険です。

食べ物はすべて新鮮な物に限る。新鮮な物を過食に陥らない程度に與へるが夏の食物のコツです。但し、身體鍛錬には規則正しく行ふべきが通則であるから、食物に於ても規則正しく與ふべきは申迄ありません。近頃は食中毒といふ病氣が八ヶ間數く云はれますが、これは食物の腐敗や黴菌混入が原因ですから、食物新鮮をモットーにしてかゝれば中毒でも傳染病でも大抵防ぐ事は出来ます。一々の食物をさう扱ふが、一番衛生的だ等の事は長くなりますからこゝには省きます。凡そ傳染病の中で夏多いのは、赤痢、疫痢、腸チフス、コレラなどの所謂消化器傳染病ですが、これ等は悉く口から病菌が入つて病氣を起すので、飲食物さへ注意すれば絶対安全です。其注意といふのは、『新鮮な、そして病菌のない飲食物』です、こゝにいふ飲食物はさうして獲られるかを申します。いろ／＼薬を用ひたりするよりも、常識で清潔を思ふやうに取扱へば、病菌撲滅に對しても大體目的を達し得るものですから、飲食物は新鮮にして清潔に取り扱ふことを忘れなければ大過ない筈であります。

○

只一つ云ひ添へたい事は「バナ、」の問題です。バナ、をば幼児に食べさせない家庭がかなりあるやうです。理由を聞くに、バナ、は幼児に危険だといふことです。さう危険かを訊ねるに、バナ、は幼児には消化が悪く、且つ疫痢の原因になるを申すのであります。しかし、バナ、が消化の悪いことや、疫痢の誘因を爲すといふやうな事は、ここから始まつたか私は知らないが眞實とは思へないのであります。薄く切つてよく嚙まして吞み込むやうに教えれば大丈夫なものです。ほんさうにバナ、其ものが疫痢の誘因になつたり、消化不良を起すものならば、バナ、の名産地である沖繩には澤山こんな病氣がある筈なのに、あの土地にはほんさうバナ、消化不良や、疫痢といふ病氣は絶無であるといふ事實から見ても、バ

ナ、有害論は成り立つまいと或る人が話して居りましたが尤の事と思ひます。若しバナ、有害といふ根拠を、疫痢患者の便中にバナ、が消化されずに出て來たといふ事實に置いたと思すれば、穿鑿不足の誹を免れません。私自身もバナ、が疫痢の誘因を爲したと思ふ例、バナ、消化不良には遭遇いたしません。

バナ、のみならず、大抵の果實や野菜は幼児に與へるやうに仕向けたいと思ひます。果實や野菜の身の内部は全くの無菌と見てよい。之れが有害に變るのは、これ等を扱ふ手や刃物や、浸け置く水が有害だからである。肉や魚もほとゞ之と同じ理窟がいへるのであるが、然るに罪をあたかも食物其物に在る如く宣傳されては、食物は人を怨むでありませう。こゝにいふ根本を辨へて、害を除くやうにするのが衛生です。この要領で、飲食物はむしろ大膽に幼児に與へた方が幼児のために効果的であります。

○  
次に『薄着』の事を申します。

夏は薄着がよいといふ事は誰しも感じるこゝでわざ／＼説く必要はないやうであります。暑いから薄着にするのだといふ理由以外に心得べき事がありますから申して置きたいと思ひます。つまり薄着にするのは、努めて皮膚を自然に近づけたいからです。日光や外氣や水が直接に皮膚に當つて欲しいからです。こゝにいふ事は夏の外の季節には到底望めない事です。しかし、こゝとする事は幼児の健康上無條件に必要なこゝです。

○  
こゝにいふ譯ですから薄着も薄着、なるべく極端な薄着であるこゝの無衣、即ち裸體で以て夏を過ごさせていたゞきたいのであります。しかし腹だけには軽い腹巻が入用であります。薄着にする目的がかやうに皮膚を自然に近づけるに在り



ますから、裸體にして、而かも家の中に居させたのでは効果が少いわけです。

ごしく戸外へお連れなさい。一日の大部分を戸外で暮らさすやうにしていたゞきたい。(日射病の用心は忘れてはなりません)その位ですから日中は勿論、戸障子、窓は開放して置く。夜、寝てからも出来る限りは開けたまゝで寝る。(雨風の烈しい時は閉ぢる)。

水泳は幼児にも危険のないやうに注意して行はすがよい。しかし、満四歳以前の幼児には温度を注意したプールの外は、なるべく控へたい。四歳以後の幼児に水泳さす場合には、水泳を行ふ前、全身を水で洗つてからがよい。いきなり水へ飛び込ませるのはいろくゝな害や危険が伴ふのであります。

○

轉地に行く幼児で、山がよいか河がよいかを頭を悩ましてる親御さん達を見受けます。空氣だけを調べて、その清潔度や、氣温や、オゾン量、紫外線量、空氣、陰イオン量などを見るに、一般には山の方が河より遙かに優れて居るのであります。であるから、如何なる幼児も海よりは山の方へ行つたがよいと云へるかに云ふに、「そこには種々な條件があつて、左様にまるらぬのであります。それは各々の家庭的事情もあり、若し病身であればその病氣にもよります。

海は概して刺戟的であり、山は鎮靜的である。刺戟的の處へ元來敏感な幼児を連れて行くに餘計興奮して終ふ。鈍感的の幼児は却て海の刺戟的の事によつて精神的にも身體的にも効果を獲る。神經質、心臟、脚氣、眼病の幼児が海を避けさせられるのはこの意味である。呼吸器病の幼児は山を擇ぶべきである。

しかし概して曰ふに、山は單調であるから幼児は倦み易い。むしろ海の變化多きを喜ぶのが通常である。山に於てこの缺點さへ補へば、一般的に觀れば海よりも山を推奨するが正しいやうに思へる。

○ 精神鍛錬の事を幼児に行ふことは、或は不必要かも知れない。しかし、四歳以後に於ては輕んずべからざる一項目に私には思へる。殊に兩親と密接に生活する機會の多い夏季に於て忽にいたくないと思はれる。しかし其方法については倉橋先生の教を仰ぐより外はない。

○ 早起き、早寢を勧めます。夏の家庭は、殊に年長の同胞の休暇中なので、やゝもするに放懶に流れ、朝寢、夜更しに陥り、其お接伴を幼児が喰つて、夜更かし、朝寢になり易い事は嚴に戒むべきである。

早起きさせたら急いで戸外に連れ出す。薄着である事は勿論である。事情の免す限り跳足にする。

午睡は一時間位は必ず取らせるがよい。午睡の効果は既に周知の事である。

○ 適當に夏を過ぎさせれば、見違へるほど幼児は健康になつて、それが、やがて来る秋、冬、春まで蓄積されて、健康増進の上に著しい効果のあつた事を親御さん達にお氣付きになるだらうと思ひます。

# 紫外線の話

東京女子高等師範學校教授

林 太 郎

日光が赤、橙、黄、緑、青、藍、紫等の色をもつた光の集りである事は日光をプリズムにあて、スペクトルにして見ればわかるが、これらの眼に見える所謂可視光線の他に眼に見えない紫外線と赤外線とが含まれてゐる。紫外線はスペクトルにするに紫の外側に來るからかやうに呼び、日焦けをおこさせる光である。赤外線はスペクトルの赤の外側に來るからかやうに呼び、日光のあたゝかさはこれによるのである。

日光が健康に必要なことは今更いふまでもないが、日光のこれらの光の中で生物體に特に有效なのは紫外線である。赤外線も有効であるらしいが、可視光線はこれらに比して特に効果はないらしい。

紫外線の人體に及ぼす作用は種々知られてゐる。ある程度以上紫外線にあたるに皮膚が赤くなり、色素を生じる、日焦け雪焦けはこれである。脈搏が減じて充實し、呼吸数が少くなつて深くなり、血壓が降つて、體内の新陳代謝が盛になる。又殺菌作用を示し微生物を死滅させるから皮膚の疾患治療などに用ひられる。日光消毒もこの作用によるのである。併し紫外線の最も重要な作用は抗佝僂病性作用である。佝僂病はカルシウム及燐の新陳代謝が圓滑にゆかぬため骨の形成が十分にゆかぬ病で、成長期の小供におれば肢その他各處の骨が彎曲し脊柱が彎曲すればせむしとなり、一般に骨が弱くなる。

佝僂病は體内にビタミンDが缺乏するに起こるのであるが、ビタミンDは牛乳、バター、卵黄、魚肉等の食品中に含ま

れてゐるが一般の食品中には少い。ビタミンDは動物體には廣く分布してゐるコレステリンといふ物質中に少量含まれてゐるエルゴステリン等といふ物質が紫外線に照射されるに化學變化をおこして生ずるものである事が分つた。理研で賣つてゐるビタミンD油劑は理研の研究により、乾椎茸がエルゴステリンを比較的多く含んでゐる事がわかつたので、乾椎茸からエルゴステリンを分離しこれに水銀燈を用ひて紫外線を照射してビタミンDに變化させ、これをオリーブ油に含ませたものである。これを牛乳、溫湯、スープ等の食物中に少し宛混じてやればよい事は確である。併し特にビタミンDをこらなくても十分に日光をあびて紫外線を受ければ皮下に存するエルゴステリンはビタミンDに變じるからそれでよい。

乳牛の牛舎に太陽燈を置いて紫外線で照射した處、その牛乳は抗佝僂病性がました事が鼠による實驗で確められたといふ報告や、雞舎に太陽燈を置いて毎日十分宛照射した處、照射しない雞群の二倍の産卵をし且その卵は皆孵化して丈夫な雛が生れたといふ報告もある。この作用は人に對しても同様であらう。

去年の七月上野の動物園で生れたジラフの仔が、生後一ヶ月程したとき運動が不活潑になり、前肢が跛をひき肘部が腫れ前肢の膝が曲つて佝僂病の徴候をあらはした。そこでビタミンD製劑ミカルシウム劑ミを加へた處五十日程で治つた相である。今年の三月にまた運動が不活潑になつたので、これは冬の間戸外にあまり出ず紫外線の不足による佝僂病の前徴と見られたのでビタミンD製劑を與へるにも、出来るだけ日光浴をさせた由古賀園長の書かれたものを見た。

地表に到達する日光中の紫外線の量は甚だ僅かで、その上天候、季節、時刻、土地の状態等により更に減少する。光はエネルギーであるからエネルギーの量で日光中の赤外線、可視光線、紫外線の量を比較するにそれ／＼約六〇%、約四〇%、一%以下の比となる。

地表に到達する紫外線の量は季節によつて異なる。スイスに於ける實驗による正午頃の量で比較するに次表の如く六、

七、八月が最高を示してゐる、一日の長さも夏は長く冬は短いから一日全體の紫外線量も夏が冬よりもずっと多い事なる。

紫外線の量の比	月
61	1月
127	2月
203	3月
286	4月
400	5月
422	6月
418	7月
413	8月
302	9月
202	10月
85	11月
52	12月

我國では六月は梅雨期で天候がわるいからスイスは異なるが大體夏多く少しい事は明である。

である。次表は東京の本郷で八月の晴天の日の測定の結果で數値は比較的のものである。

紫外線の量の比	時刻	
	午前	午後
25	7時	
43	8時	
53	9時	
58	10時	
61	11時	
62	12時	
61	1時	
58	2時	
55	3時	
45	4時	
27	5時	

晴み曇では大いに異り、晴れてゐても雲のあるなしでは、「もやし」なさは少しかゝつてゐても大に減少させる、都會は塵埃や煤煙や霧が大氣中に多いのでこれらに遮られて紫外線の量は空氣の清澄な田舎、海岸、山間の地方にくらべるとかなり減じてゐる、今手もきに材料がないので確ではないが東京でも深川、本所邊に荻窪、吉祥寺邊には大分差があるといふ實

測がある。次表は大體同時季、晴天の日の十一時頃の各地の紫外線の量の比較である。

光は波動性を有してゐるが、色の異なる光は波動の波長(波の山から山迄の距離)が異なるのである。可視光線の波長は約七〇〇Åから四〇〇Åに互つてゐて赤は最も長く七〇〇Å乃至六五〇Åで順次橙、黄、緑、青、藍に減少して紫は最も短く四五〇Å乃至四〇〇Åである。(Å=オングスレーム)は光の波長を表すに用ひられる長さの單位で千分の千分の

一の長さであつる。

保田	40
中禪寺湖	45
上高地(雲あり)	40
鎌倉	35
山中湖(霧あり)	35
横濱本牧	30
東京日本橋	30

紫外線の波長は紫より短かくて約四〇〇〇Åから二〇〇〇Å迄に互つて種々のものがあるが、地表に到達する日光中のものは約二九〇〇Å迄でこれより波長の短い紫外線は到達しない、ドルノミいふ學者の研究によるご人體に特に有效な紫外線は三二〇〇Åから二九〇〇Åの範圍のものであるごいふ。この範圍の紫外線をドルノ線或は健康線ごいふが地表に達する日光中の紫外線は丁度健康線を含んでゐるごことになる。

普通の電燈から發する光はかなり明るいがこれをスペクトルにして見るご可視光線、赤外線は日光ご同様或はそれ以上に含んでゐるが紫外線は非常に少くて殊に波長の短いドルノ線は殆ご含んでゐない、従て普通の電燈の光は健康上特に有效ではない。

太陽自身は二九〇〇Åよりも短い波長の紫外線を發してゐる事は理論上明であるが、地表に到達する日光中には約二九〇〇Åより短い波長の紫外線がないのは、地球を厚く包む大氣中を日光が通過して來る間に、短い波長の紫外線はこれに吸收されてしまふためご考へられてゐる。朝や夕方の方やうに太陽の位置が低い時は晝間の太陽の高いごきよりも大氣中を通過する距離が長い事は明で、それに朝は霧、夕方は埃の影響も加はるためか、朝夕には三二五〇Å位よりも短いものは來なかつたごいふ實驗報告もある、即ち朝夕には健康線の大部分が來ないのである。

電燈の光が紫外線を殆ご含んでゐないのは、白熱するタンングステンのフィラメント自身から發散する量も少い上に、硝子の球で掩はれてゐる事が大きな原因である。普通の硝子は可視光線や赤外線はよく通すが紫外線は殆ご吸収してしまつて通し難い。従て普通の窓硝子をこして入つて來る日光は明るく温いが、約三二〇〇Åより短い紫外線は含まれてないから健康線は含まれてゐない譯である。

硝子でも成分をかへて紫外線をよく通す硝子も種々作られてゐる。バイタ硝子、ウビオール硝子等はその例で、普通の

硝子が一しか通さぬ紫外線を、三〇倍近く通す事が出来る。ビルディングの室内などで健康のため紫外線を發する電燈（バイタライトランプ）はその一例である（が用ひられるが、これは普通のタングステン電球のフィラメントの温度を更に高温にするやうにして紫外線を多く發するやうにするこゝにも、電球の硝子もバイタ硝子の如き紫外線を通すものを用ひたものである。

一九二五—二六年の實驗であるが、英國の小學校で一方の教室の窓硝子にはバイタ硝子を用ひ、一方の教室では普通の窓硝子を用ひて比較した處一年後には兒童三十名の平均體重の増加及身長の増加にかなりの差が認められて、バイタ硝子の有效な事が明になつたといふ、バイタ硝子等は高價のもので一般には用ひ難いが、英國の如く日光にめぐまれぬ國ではかゝる必要もあらうが我國の如く四時日光に恵れた國では戶外へさへ出れば十分の紫外線が浴びられるのであるから室の窓にまで心配する事はない。

障子の紙は新しいときは二三〇〇Å位迄の短い紫外線も通し、又透過性も普通の硝子よりは大きい事が認められてゐる。食品等の包装等に用ひられるセロファンは二二六〇Å位迄の短い紫外線を通し、又透過量も普通ガラスの十倍も通して健康紫外線透過の點からは甚だ有效なものである、たゞ破れ易く、濕氣による延び縮みが大きい等の缺點がある、外國では紫外線浴用の衣服にセロファンを用ひたものが賣られてゐる事を聞いた事がある。

戶外に立つて日光に照らされるまき太陽から直射する光の外に地表、天空からの反射等により間接に來る光がかなり多い、紫外線についても同じである、スキーにゆくまきつよく日焦けするのは直射光の他に雪面からの反射が加はるからである、三月のスキー地で行はれた一實驗によるまき一〇〇の日光が雪面に直射するまきその側に垂直にたてた面へ約四五%が反射する事が認められた、雪のない地上ではこの反射率はすつと少くして七%位である、太陽から直接でなく靑空から來る可

視光線や紫外線の量も仲々多い、これは意外に多くて晴天の晝に直接太陽から来る紫外線の約一、二倍量の紫外線が青空から来るといふ實驗の報告がある、青空には微細な塵や霧等が浮いてゐて、これに日光があたつて反射するのである、夕方日が没してもなほ空があかるいのもこのためであらう、山の寫眞をさるさきフィルムターなしでさるさき遠くの山がかすんでつきりうつらぬのは、青空のだす紫外線が感光して遠い山から来る弱い光を重つてしまふためである。

この事から考へるに紫外線をあびるのには日光に直射されなくても青空の仰げる所でよい事なる、窓を十分あけはなした室の中へもかなり入つて来る事になる。

日光に照らされるさきに衣服をきるよりも裸の方がよいであらうと思はれる事は、顔や手足の露出した處が日焦けし易い事から明であるが、衣服を着てゐても布によつては案外多く紫外線の通るものがある。次の實驗結果は理研で行はれたものから書き抜いたものであつて、紫外線量を測定する器械の直前に布をおいて、布を通して来る紫外線量を測つたもので、布をおかないさきの量を1として表はしてある。

名稱	色	密度	紫外線
羽二重	白	8.8	1.02
	赤	9.5	0.79
	黒	9.7	0.73
縮緬	白	13.5	0.90
	赤	15.0	0.64
	黒	15.1	0.35
銘仙	白	9.3	1.06
	赤	10.0	0.82
	黒	10.2	0.73
絹	白	2.6	1.02
	赤	2.7	0.99
	黒	2.7	0.96
さらし木綿	白	12.1	1.14
	赤	13.1	1.01
	黒	13.3	0.86
小倉	白	18.6	0.98
	しりふり	22.3	0.54
	黒	29.7	0.43
クレープ	白	16.4	1.17
タオル	白	19.5	1.06
	赤	23.0	0.81
	黒	23.4	0.60
ネル	白	22.6	0.82
	赤	25.8	0.48
	黒	26.6	0.35
洋傘用織子	黒	17.0	0.07
麻布	白	18.0	1.02
	白	21.5	0.96
セル	白	23.8	0.73
	赤	24.1	0.65
	黒	24.1	0.65
メリンス	白	10.0	1.13
	赤	10.7	1.01
	黒	10.9	0.88
サージ	白	23.8	0.90
	赤	26.4	0.64
	黒	26.8	0.27
極細毛絲編物	白	20.0	1.07
	赤	22.2	0.98
	黒	22.3	0.83



同じ布でも染め色により異り又同じ材料でも織り方により異なる。布地の粗密の度は一平方糎の重さ（ミリグラム）で表はしてある。

色の濃いもの、地質の密のものが紫外線の透過を妨げる事がわかる。これは勿論一枚しか布をおかないから何枚も重ねたときは一枚毎にこの割合で減じてゆくから非常に少くなる事は明である。併しこゝに面白いことは、白地のものゝ多くは布のない裸出のときよりも多くの紫外線があたる事で、これは布により光の反射廻折なきがおこつて多くの光が来る事を示してゐて、うすい白い布を一枚きる事は、裸よりも却て紫外線の體の表面に來る量が多い事を示してゐる。

ビルディング等の如く日光の入りぬ室で、健康上使用される事のある紫外線を發する人工太陽燈には、前にのべたバイタライトランプの如く普通の電球と同様に簡單にこりあつかへるものがある。東京驛の出札室でこれを用ひてゐる事がいつか新聞に出てゐた。電球の中に水銀を少し入れて、紫外線の量をましたものもある。電燈の笠も紫外線をよく反射する金屬でできてゐるものを用ひるこれらの太陽燈は、いづれも可視光線も發して照明になると共に、健康紫外線をだすのであるが、治療用なきには主に紫外線を發する石英水銀燈が用ひられる。これは紫外線をよく透過する水晶を融かして作つた硝子の管の中に、水銀を少し入れて電流を通ずるに、水銀の蒸氣が發光するもので、強い紫外線を發し殊に波長の短いものもある。これはひびく眼をおかすから紫外線を透さぬ色硝子の眼鏡をかけて照らすのである。

以上紫外線について書いたが、我國の如く四時日光のゆたかな國では努めて戸外に出て日光に照らされる事が何よりの健康法で發育中の子供には何よりも望ましい事である。

# 水棲昆蟲記

——「さんぼ」の子供「やま」の話——

東京女子高等師範學校教授

久 米 又 三

稔ちゃん

もう今年も「やんま」が出る頃になつたね。稔ちゃんが「さんぼ」好きで、一日中竿を持つて駆廻つて居るよ云ふ話、稔ちゃんのお父さんから聞いたよ。「さんぼ」を逃がしてやれよ云はれても、「やんま」だけはきうしても放してやらないよ云ふぢやないか。去年送つた「さんぼ」圖説の本は役に立つて居る？ 今日だね、「さんぼ」の子供を寫真に撮つたのがあるからお送りする。序でに寫眞の説明も書いて置かう。

「さんぼ」の子供を「やま」と云つて、親と異つて水の中に棲んで居るよ云ふ事知つて居る？「さんぼ」の親は蟲の中でも仲々偉い奴なんだ。蟲は大抵翅があつて、空を飛ぶよこぎが出来るから、空も飛べない様な他の動物にくらべたら非常に立派な道具を持つて居る。だから蟲は此の世界で侮り難い勢力を張つて居る。其様な蟲の中でも、「さんぼ」が偉い奴だよ云ふのは、「さんぼ」は一寸休む折に物に捉る外は、他の蟲を捕つたり喰べたり、其の他なんでも飛びながらやつて了ふ。他の蟲にも翅があるが、「さんぼ」程に烈しい空中生活をする者はないだらう。恐らく鳥にもこんなのはあるまい。

そんな親「さんぼ」の子供が、物好きにも水の中に棲むよは變だけれぎ、それは本當だよ。その上此の「やま」は水の中に



蜻蛉類(左)の「ごや」と

蜻蛉類(右)の「ごや」の<sup>2</sup>/<sub>3</sub>大

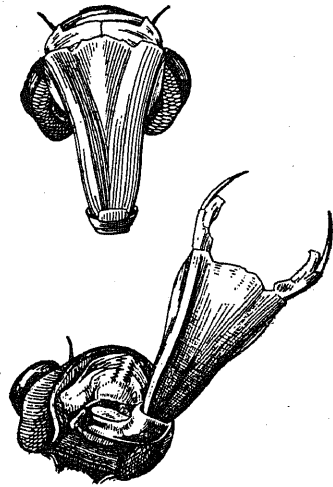
棲んで、水に棲む他の蟲仲間で大分偉張つて暮して居る。弱い筈の子供が偉張つて暮せるのも、水に棲む他の蟲共が割合に弱蟲揃ひのせいでもあらう。しかし子供の時でも弱蟲仲間に入つて、偉張つて暮さうと云ふ勝氣はさうも親譲りらしい。

親「さんぼ」に色々變つた種類がある様に、「やご」にも亦色々變つたのがある。慣れた人は、「やご」を見てすぐ親の名を云ふことが出来るが、慣れないとされも皆同じ様に見える。大體の見當を云ふと、「やんま」や「さなへさんぼ」の類(蜻蛉類)の「やご」は、腹が筒の様に圓くて長くなつて居る。

「あかね」や「しほからさんぼ」の類(蜻蛉類)では、體がもつと短くて、又腹が扁たくて幅廣い。「いごさんぼ」や「はぐろさんぼ」等(豆娘類)のは前の二つに比べると、體は親に似てもつと小さく、細くてなよ／＼して居る。又體の後に鰓と云ふ三枚の羽の様なものがついて居る。餘り細くて他と釣合が取れないので、寫真の中へは入れなかつた。寫真では判らないが、「やご」の色は綺麗ぢやない。親「さんぼ」は思ひ切つて精悍な色彩を持つて居るが、「やご」がこんなに見窄らしいのは、比較的弱體の保護のためだらう。大抵川や池の底にある泥に似た色か、せい／＼水草に似た薄い黄綠色である。池へ行つて「やご」を捜しても見當らないのは此の色のせいでもある。それに「やご」は大抵泥の中へ潜つて居る。泥の外へ出してやる時、腹を振つて泥の中へ潜つてゆく。だから「やご」を探りたかつたら、底の泥を淺く掘ふに限る。

「やご」で感心するものが二つある。一つは獲物を捕るための口の道具と、一つは水の中で呼吸する道具とである。「や

第 二 圖



「ごや」がマスクを疊んだ所  
(上)と伸べたことろ(下)

「ご」の顔を見るに、人が防毒マスクを掛けた様な恰好をして居る。あれは矢張りマスクミ呼んで居るが、實は顎が延びたものである。「やご」が泥に潜つて頭だけを出して居る時は、マスクを疊んで獲物が来るのを待つて居る。獲物が通りかゝるに、實に驚く程の速さでマスクを伸す。伸びたマスクの先には鋭くミがつた鉤があつて、之が獲物を突刺すのである。「やご」は「おたまじやくし」や時には小さい魚位は刺すことがあるよ。親「さんぼ」は

蚊を退治してくれるが、「やご」は蚊の子供「ぼうふら」を退治してくれる。親子揃つて蚊の親子を征伐してくれるミは有難いことだ。も一つ「やご」で面白い事は呼吸の仕方だ云つた。親「さんぼ」を水の中へ入れたら死ぬのは、親「さんぼ」には水の中で呼吸をする道具がないからである。「やご」はその便利な道具を持つて居る。「いごさんぼ」の「やご」には體の後端に鰓がある云つたが、あれが此の道具である。所がこんな種類のものとは他の蟲でも持つて居るのがある。しかし「やご」でも「あかね」や「やんま」のものでは全く別な工夫がこらしてある。それは鰓が體の外に出て居るのでなくて、腸の壁に澤山の壁があつて、此の部分が鰓の働きをする。だから「やご」は肛門から水を出入させて呼吸をするし、體を急に前へ進める時などは、腸内の水を急に噴出させて、其の反動でぐつミ前へ出たりする。池か川へ行つて、「やご」を掬つて来て、金魚鉢で飼つてごらん。底に泥を入れ、水草も入れてやり、他の蟲も一緒に入れてやつたら「やご」の活動が見物出来るよ。

「さんぼ」の色々な種類が、一年の様々な時期に出て来る云ふのは、つまり子供の「やご」が親になつて飛び出す時期が種類に依つて變つて居る云ふことだ。「さなへさんぼ」の様に早く出る種類は、田舎の川べりへ行く五月にはもう澤山飛んで居る。稔ちやんの好きな「ぎんやんま」は七月頃から九月頃だらう。今迄水の中に住んで居た「やご」に、急に翅が出来て空を飛び出す所を見るのは面白いことだけれき、大抵の「さんぼ」は夜中に變つて了ふので一寸簡單には見られない。稔ちやんの好きな「ぎんやんま」もさうだよ。だけき「さんぼ」の中でも晝間「やご」から變つて出て来るものもある。春出て来る「さなへさんぼ」等は大抵太陽が高く昇つてから、正午前後迄に「さんぼ」に變つて了ふ。寫眞は「さなへさんぼ」の「やご」から、今「さんぼ」が出掛つた所を撮つたもので、ものが小さいから大分引伸したのだ。一寸變つて面白いだらう。

「さなへさんぼ」の「やご」は、「やんま」の「やご」の半分位しかない。親が小さい様に子供も小さい、此の「やご」を水槽に入れて絲みゝ等を充分食べさせて置く。五月頃には必ず「さんぼ」になる。「さんぼ」に變ることを羽化する云ふが、羽化する前の「やご」は眼の色が變つて居る。慣れるときの「やご」が明朝あたりに羽化するか判断がつく。五月の或朝、叔父さんが水槽を見て居たら、一匹の「やご」がもぐもぐ動いて草の莖を上つて来た。確に眼の色が赤味を帯びて平常さは變つて居る。やがて水からすつかり離れて、足場を固める様な格好で莖を抱いた。じつとして居る。だんぐり身體が乾いて来て、乾いた泥の様になつた。未だじつとして居る。するに突然、胸の背中の所に小さな割れ目が出来た。「やご」の呼吸が荒くなつて、その度に割れ目が縦に伸びてゆく。此の呼吸は口から腸へ空氣を入れるものらしい。身體が膨れたり、縮んだりする様子が見える。割れ目が大きくなつてゆくと、割れ目の所に、全く色の異つた膨れたものが顔を出し始めた。親「さんぼ」の胸の背面だ。浅い緑色で、濕つた感じがする。もう三分たつた。縦の割れ目と直角に横の割れ目が出来ると、「さんぼ」の頭、大きな複眼が膨らみながら現れて来た。色彩はみんな淡い。「やご」から抜け出た頭と胸とは、その儘背の方へ伸



の「ごや」(半倍二約)化羽の「ぼんとへなき」  
る居てけか出が「ぼんと」親てけ裂が中背

びて来る。するに同時に三對の肢が前から順々に、又同時に前後の翅が順々に現はれて「やご」の身體から抜ける様にして出て来る。はじめから頂度十分位かゝつた。肢は細くてこれで順調に育つのかしらと思はれる位だ。翅は未だ短くて「さんぼ」の背にちよびりくつついて居る。寫眞は頂度こんな所で撮つたものだ。背中から斜右に下つて少しよれよれに見えるものが抜けたばかりの翅で、翅は屏風の様になく疊まれて居る。こゝまで來たら七八分間少しも動かない。さも疲れはて、一休みしなくてはもう動けないと云ふ風に。するに突然頭を振つて、「やご」「やご」云つてももう半分脱殻ではあるが一の身體へ向つて起きよるに、動きさうもなかつた肢を動かして、脱殻を抱く様にした。其の途端腹の方を上げるに、腹がすうと抜けて行つた。後へ残つた「やご」は之ですつかり脱殻になつて了つた。脱けたばかりの親「さんぼ」は、身體は軟かさうで、浅い海老茶と浅い黄緑の色合が如何にも弱々しい感じを與へる。觸つたら水でもつきさうに潤ほつた皮膚が、風に當つて傷々しい。腹が抜けてあき三分もするに、小さく疊まれて居た翅が根元から伸び始める。「ゴム」製の刀に呼吸を入れる様にだんぐ先迄伸びて行く。すつかり伸び切る迄には五分間もかつたらう。

是でやつ親「さんぼ」らしくなつた。背中が割れてから翅が伸び切る迄に二十分もかゝつた。身體の濕りが乾く毎に、

色はずん／＼鮮かに、又濃さも増して来る。つや／＼した光澤が陽を浴びて輝く。なよ／＼した翅も硬くなつて、セロファン様のバリバリ音が出さうになつた。あと十分も経つて、翅を開いて飛ぶことも出来る。脱けたての「さんぼ」の麗はしいこと。穢一つ無き自然の完全さよ。テニソン云ふ有名な詩人が、「二つの聲」を題する詩の中に入った居るさうだ。

此の日吾蜻蛉を見たり

彼舊きふしぎをすてゝ泉を出するや

内なる生命いのち舊き殻を破り

碧石の鎧まこひて彼は出で來ぬ。

潤ひ去れば紗の如くつばさをひろげ

露しげき牧場を、野を

光りきらめきて彼は飛びゆく。

英詩なんか生れて始めて譯して見たので、人に見せては恥かしいけれど、此の詩を讀むと、偉い詩人の觀察の並々でないことに感じ入る。

テニソンが歌つた「さんぼ」がどんな種類のものか判らないが、多分夜中に羽化して早朝飛び立つ種類のものであらう。前にも言つた様に、「きんやんま」等大抵の「さんぼ」は夜中に羽化する。大體の順序は「さなへさんぼ」同じ事であるが、親「さんぼ」が「やぶ」から脱けて出せばらく休む折には、もつと仰向けにからだを反らすことゝし、完全に羽化するにはも少

し時間がかゝる點等がちがつて居る。「さなへさんぼ」では、羽化が始つてから兩翅が開ききるには大體一時間内で出來たが、「ぎんやんま」や「しほからさんぼ」等ではさつこ四時間もかゝる様だ。

話が少し難かしくなるが、羽化したての「さんぼ」が何故濕つて居るかと言ふは、羽化が始る前に、舊い皮(「やぶ」の皮膚)の下に新しい皮(親「さんぼ」の皮膚)が新生する。此の二枚の皮の間に、脱皮腺から分泌された脱皮液が蓄つて、此の液が脱け出した親「さんぼ」の皮を潤はして居る譯である。羽化する時「やぶ」の背中が最初に裂けるのは、もこ／＼あの部分の皮は薄く出來て居る。羽化する時に、「やぶ」が口から大きく呼吸を吸つたり、腹部を收縮さして血を前方の方に押しやつたりするこ、「やぶ」の中に小さくおさまつて居る親「さんぼ」の身體が膨らんで、その結果「やぶ」の背中が割れるのである。だから羽化の途中、翅にでも傷をつけて、中の血を流しだしたりするこ、羽化は順調には行はれない。

少しばかり説明するつもりで書き出したのに、大分長くなつて來た。今年の「さんぼ」狩りはどうかね。面白いのがこれらを見せて下さい。

## 會 告 八月號休刊

本誌八月號は休刊し、九月に於て、八、九兩月號を合冊發刊いたします。

昭和十三年七月

日本幼稚園協會



# 子供・子供・子供

——皇軍慰問の抜書より——

内 山 憲 堂

東京私立幼稚園聯盟を代表して、山内勇仙、加藤武夫の兩君と小生の三人で五月二十六日東京を立ち、長崎から上海に渡つて、上海、南京、蘇州、杭州等の海軍陸軍の皇軍を慰問して六月二十日東京へ歸つた慰問帖から「童心」を拾つて見ました。

## A 兵隊さんは子供

幼稚園代表——さうしても、私たちは漫談や、浪曲や獨唱を持つては行けない立場に置かれてゐる。戦場で生命を懸けての丁半勝負に馴らされた、荒武者たちが受けてくれるかさうか解らないが、どこまでも幼稚園代表らしく、ぶつかつて見やうではないか、代表者三人相談をして、童話と繪噺と人形芝居を持つて行くことにした。私の人形芝居も、新作を避けて、常に幼児に見せ、幼児にやらせてゐる、「笑の風」に「舌切雀」を持ち出した。

六月四日上海陸戦隊第二大隊本部で、最初の幕は切つて落とした。ビクビクしながら演じたが、その結果我々の今日までの杞憂は全然吹き飛ばされて仕舞つた。兵隊さんたちは繪噺、人形芝居の内へ入り切つて、心からの笑ひを爆發させ、

子供の様に手を拍つてよるこんでくれる。童心そのものである。

私たちは今回の慰問旅行に於ける二十数回の慰問を通じて、幼児に見せるのさ何等變らない氣持ちで話し得た結論は「兵隊さんは子供である」云ふことであつた。

◇ 上海で慰問をしたときの事である。慰問を了へて部隊長の部屋で休んでゐるさ、隣りの士官室から、ピーピー云ふ時ならぬ笛の音「サテは、支那軍が遺棄した例のチャラメロの様な支那ラップを吹いてゐるのかな」思ひながら覗いて見ると、士官たちは今着いた慰問袋の中に入つてゐたゴム風船をふくらましてはピーピーならしてゐるのである。その打ち與じ笑つてゐる様子は、髭面の尉官殿は思はれない、さうも幼稚園の子供である。

◇ 航空隊の本部も二三ヶ所慰問した。梅雨期に入つた連日の雨で、一息入れてゐる飛行士たちは部屋の中には納まつてゐない、演藝會が開かれて、ハチ切れる元氣を爆笑に晴らしてゐる。漫談あり浪曲あり、流行歌に舞踊、萬才、聲色、端歌、詩吟等各種各様のものが飛び出して来る。そしてすべてが無邪氣で、恰度中學生の卒業の時に於ける演藝會を見てゐる様である。慰問に行つた我々が腹を抱へて笑はされて仕舞つた、こちらが慰問された形だ。

◇ 是が支那全土を震撼させ、世界各國の耳目を驚かした荒鷲であらうか、さうしても無邪氣な中學生さしか考へられない。

◇ 軍艦朝日へ慰問に行つた。七時からやつてくれさのこさで、夕飯を馳走されてまだ少し時間があるので甲板から黃浦江の景色を眺めてゐた。

甲板では當番士官が水兵たちを指圖して夕方の仕末をしてゐる。中尉が大尉らしかつたが背が高く、カイゼル髭の嚴めしい士官である。やがて「水兵米を持つて来い！」と命令を下した。米をさうするかき見てゐるミ、水兵の持つて来た米を受取るミ、マストの方を向いて、しきりに何か呼んでゐる。マストから下りて来たのは二羽の鳩である。

士官は米を甲板へ撒いて、鳩に與へるミ鳩はうれしさうに米を喰べて、士官が蹠んでゐる足の下まで来る程に馴れてゐる。

その姿はさう見ても嚴めしいカイゼル髭の士官ではなく、淺草の觀音様の前で鳩に豆をやつてゐる幼児である。話に聞けば、その鳩は支那の迷ひ鳩が軍艦へ来たので飼つてゐるのださうな、なほ更面白さを感じた。

## B 支那の子供たち

大綱を誤つた蔣介石のために支那の良民たちがみんなに苦しんでゐるか、こゝにも支那の子供たちの哀れな姿を澤山に見せられた。

◇

汽車で驛へつくミ、驛の附近の子供たちが二十人も三十人も汽車の窓の下へ来て「煙草進上！」「めし進上！」ミやつて来る。「煙草下さい、食物下さい」ミ云ふ意味である。煙草は親に、食物は自分等の空腹を満たすのである。汽車が進行し出してでもごんごん追つかけて「進上々々」ミやつて来る。一錢の銅貨、一本の空瓶でも與へるミ、それを拾ふために、泥の中を、轉びながら奪ひ合つてゐる、その様子は實に氣の毒な程である。

◇ 部隊へ行くミ、子供たちが、兵隊さんの残飯を貰ひに来てゐる。庭の掃除をしたり、片付けものゝ手傳ひをしたりして、残飯を貰つて行くのである。大きな部隊なごになるミ、入れ物を持つた子供たちが、一丁あまりも行列をしてゐるごがある。

◇ 南京の私たちの泊つてゐる旅館の前に支那の子供が遊んでゐる。十一二の姉らしいのに抱かれてゐる三つ四つ位の小さい子供が、實に可愛らしいので、すっかり仲よしになつて、お菓子か何かやらうミ思つたが、恰度持ち合せがなかつたので銅貨を一枚與へた。

◇ 子供たちはごこかへ行つたが、暫くするミ三つ四つの子供を連れた、三組も四組もがやつて来て、僕たちの前へ子供を見せにやつて来る、これには、さすがに閉口をして旅館へ飛び込んだ。

◇ 軍閥政治の壓制や、支那兵の暴戾にビクビクしてゐた支那民衆も、日本の温い手には限りなきよろこびを感じてゐる、ごごに純真なる子供たちにこの姿を明らかに見るごが出来た。

◇ 杭州西湖を案内してゐたのは、曹洞宗出身の清水副官である。駒大在學中から子供の仕事には興味を持つてゐられただけあつて、支那の子供たちまでも「シミスさん」ミなついでゐる。西湖の島へ渡る小舟にも女の子が三人ばかり同船して、嬉々としてゐる様子はトーカーにも撮りたい位であつた。

隊へ時々遊びに来る子供たちは「さよなら」「お早やう」位の日本語は自由に使用する。「白地に赤く」だまか「もしもし龜」だまか「愛國行進曲」なごを上手に歌ふ。子供たちの歌ふ「露營の夢」を速記して見た、

カ ッ テ ク リ ソ ト      イ シ ャ マ シ ク

チ カ ッ テ ク ニ チ      テ タ ガ ラ      ハ

テ カ ラ タ テ ス ニ      シ ナ リ ヨ ウ カ

シ ン ク ン ラ ッ ハ      キ キ タ ヒ ニ

マ フ タ ニ ウ カ ヒ      ハ テ ノ ナ ム



杭州で支那人の小學校へ慰問に、紙芝居人形芝居を持って行つてやつた。三組を一つにして、見せてやるのであるが、一番小さい組の女の子が二人、恐ろしがつて、さうしても來ない。先生に、すかさねながら泣き泣き後の方へ入つて來て見てゐるが、しまひにはすつかりよこんで、歸る時には、「さようなら、さようなら」みんな一緒に送つてくれた。



南京で、夕方散歩に出て、宿の近くに焼け残つた小さいお寺へ入つた。十三四の男の子がゐるので、銅貨を四五枚やつたら、すつかりよこんで、「觀々」を言ひながら、本堂横の「觀音様」から、裏の「娘々廟」からすつかり案内してくれて、ありつたけの鐘をカーンカーンしたゝいて見せてくれる。その姿が實に、うれしさうで、四五錢で思ひがけない功德をしたま自分ながらうれしくなつた。

### C 子供を考へる

こんごの慰問の旅で私の一番感激したことは、部隊長に逢つて「防備の完全なこの戦鬪によく勝利を得られましたね」を申し上げるに、ごの部隊長も口を揃へて「いや兵たちがよく働いてくれますからね」言はれるのである。何ご云ふ有り難い言葉であらう。親心である。親が子供の働きを心からよろこぶのさ少しも異ならない。

督戦隊を有する支那軍は正に反対である。この親心があり、兵は上官を助けてこそ日本軍の強さがあるのである。

妻を忘れ、親を忘れた兵士たちは、全く子供になつて、上官を親として敬ひ、親しんでゐるし、兄弟を忘れ、子供を忘れた、上官たちは兵を子供として慈しんでゐるのである。こゝにも童心は生れてゐる。

戦ひに破れ童心を失ひ、向上心も希望も、よろこびも持たない國民程氣の毒なものはない。汽車に集つて日本人に一本の煙草を乞ひ、残飯の列に先を争ふ光景を見た。

南京の飛行場へ行つたら、支那人が人夫として、飛行場で働いてゐる、彼等は、飛行場の地ならしをしたり破壊された飛行機を片づけたりして、一日働いて来て米一升貰つて行くのである。その米は支那軍が残して行つた糧食庫の米である。聞いた。何ご云ふ、みぢめなごさだらう。自分の國の飛行場、しかも、自分の國の飛行機の片づけをして、自分の國の米一升を貰つてよろこんで働いてゐる支那人——何ご云ふ哀れなごさだらう。

戦争は綱引きの様なものである。戦ふ以上は、勝つか負けるかの二つしかない。しかも負ければごごまでも引きつられ

るのである。

「戦争には負けてはならない」これは部隊長の言葉だけではない。まざままその實證を見せられた。

◇

我々幼児教育者は大いに考へなければならぬ。我々の幼児の時代に、幼児が綱引きに負ける様なこゝがあつては先祖に對して申し譯がない。

◇

支那の町を歩くに、幼児たちまでも街頭で物を賭けて勝負事に熱中してゐる様子を見る。國民性は幼児の時から作られるのである。

◇

我國の優れた民族性を生かす、立派な國民性を幼児の時から植ゑつけるに共に、精神肉體共にこゝまでも強く正しく育てゝ行かなければならぬこゝが、今回の旅全體を通じて私たちに與へられた教訓であつた。

小西信八翁には本月五日八十五歳の高齡を以て長逝せられました。本會は我國幼稚園教育の先驅者としての翁の大なる御功績に對し謹で哀悼申上げます。

日本幼稚園協會

# 童心慰問の旅

山内 勇 仙

この度、東京私立幼稚園聯盟の皇軍慰問使として、中支方面へ参りました。往復共僅かに三週間餘に過ぎませんので、大した慰問も出来ませんでした。編輯部の方から、何か寄稿せよとの事でしたから、童心的慰問として、この機会に保育に従事せらるゝ方々に御報告するのも一つの責務と存じまして、拙ない筆を執る事に致しました。御諒承下さい。

## 出 發

東京私立幼稚園聯盟の幹事會で、皇軍慰問の件が決議されました。各幼稚園々幼児より一人十錢宛の贖金によつて、慰問品を購入し、更に自由畫、手技、寫真等も贈る事、尙之を携行する慰問使も、現地に於いて、幼稚園に於けるありのままの童話、紙芝居、人形芝居を兵隊さん達にお目にかけてならん云ふ事になりました。勿論旅費は聯盟としては成立後間もない事でありますから支出の途なく、各自負擔であります。

結局、左の三名が参る事になり、役割も亦決りました。

童 話 鶴ノ木幼稚園長 加 藤 武 夫

紙芝居 龜戸幼稚園長 山 内 勇 仙

人形芝居 聖美幼稚園長 内 山 憲 堂



他の方々はさもなくも、私の役、紙芝居には何がいゝのか、ほゞ困つて了ひました。その中に庶務を引受けてゐる私の處へは慰問品として送られる各園からの手技や、醜金の受付事務、海軍省その他への打合等で、準備の日数が少ない爲に、相當多忙になりました。紙芝居を考へる事も、描く事も出来なくなりました。幸に幹事會合の席上で、この苦衷を訴へますと、結局、全甲社の「鴨取り權兵衛がまつ纏つてゐていゝだらう」と云ふ事になり、それを又和田實先生が、御自分の經營の「養成所の生徒にかゝせるから」と引受けて下さいましたので、先づ先づ、ほつと胸を撫で下ろしました。それから、慰問品の購入、荷造り、發送等を済ませると、自分の手廻り品はリツクサツクに積みこんで、愈々出發の五月二十九日になりました。幸に紙芝居もモゾー紙一枚大に描かれて、前晚に届けられましたがおちく見る事も、下稽古する暇もなくそのまゝ肩にかついで出かけました。

東京驛頭で賑やかなお見送りの萬歳と、日の丸の旗の波の裡に下關行の急行列車は西下致しました。三十日長崎着、二十一日午前十一時私共の乗船上海丸は長崎港を出帆、一路平安、六月一日午後二時上海の郵船碼頭へ横付けになりました。尤も、楊子江へ近づくにつれて、海の色は黄濁となり、黃浦江へ入ると林立する御用船に日章旗が翻り、兩岸の家は燒落ちて、愈々戦地へ來たさ云ふ感激に、船客一同は甲板に立ちよつて刻々近づく上海の風景に見られました。

### 童心慰問

これから目的の童心慰問が始まるのでありますが、先づ、旗艦出雲へ支那方面艦隊司令長官をお訪ねして挨拶に参り、慰問品は目録として呈出致しました。及川司令長官は私共を心よく引見され、温顔に微笑を湛へて、勞苦を感謝されましたが、お話の中に、女高師附屬幼稚園の及川ふみ先生が長官の御令妹だとの事に驚き、出發前に先生の御手紙をお預りしてお届けしたらさぞお喜びだつたらうと心中不束を詫びました。

今度の慰問は、海軍省副官の御高配により、慰問範圍も海軍關係を主とする事になつてゐましたから、出雲を辭するに、海軍特務機關へ参り、挨拶の後、持参した慰問品の分配、及び演技等の計畫順序を此處でして頂く事になつて居りました。それで萬事を御願ひして、更に陸戦隊本部へ挨拶に参りました。

愈々特務機關からスケヂュールが發表されて、左の處で、童心藝術?を演出致しました。

陸戦隊の中隊各所、軍艦朝日、航空隊、病院等でありました。始めは水兵さん達に小供臭い童話や、紙芝居、人形芝居は如何であらうか三一寸不安でありましたが、案ずるより産むが安く、案外に兵隊さん達を小供化して了ひました。全く兵隊さん達は純心であります。

それから、南京へ参りました。沿道の風景は日本のそれと殆んき違ひません。特に簑笠着けて田植をしてゐる田圃風景は内地そつくりであります。たゞ水牛が働らいてゐるのミ、クリークが多くて例の支那式の石橋がかゝつてゐるのミ、處々に高塔が聳えてゐるのが支那らしい風景であります。

南京でも海軍特務部の御高配で、航空隊、軍艦堅田、病院等を例の童心慰問で小供化しました。

南京は明の太祖が修築したミ云はれる城壁延々十一里に亘つて圍まれた都城であります。黒煉瓦の壁間に所々雑草の垂れ下つてゐる様は、國破山河城春草木深の感を如實に深くしました。

又汽車にゆられて、歸途は蘇州へ寄りました。マルコポーロが會つて「天に天堂あり、地に蘇州あり」ミ云つたそうです。が、戦火の跡もなく、至極平和な街であります。此處では兵站部と野戦病院で慰問。宣撫班で支那小學校四五ヶ所を豫定してありますが、日を延ばす事が出来ませんので残念ながら割愛して上海へ歸り、更に杭州へ参りました。

幸にも私の同窓の友が副官をしておりましたのが、驛まで迎へてくれました。そして、その配慮で、四ヶ所の慰問ミ、

支那小學校で一回いたしました。

杭州は史ミ景ミに富む處で、わけても西湖の美は古今から讚へられております通り、漫々たる水波、蘇堤、白堤の翠柳、周圍の山影、塔影相映じて繪畫そのものであります。

杭州は錢塘江に臨んでおりますが、この江の對岸にはまだ敗殘兵がトーチカなごを構築して頑張つております。

錢塘江は潮流で學問上名高い河でありますが、この江の注ぐ處は杭州灣で、昨年十月五日の皇軍敵前上陸地として私共には記憶に新しい處であります。

### 皇軍の辛勞

これでもう豫定の日が過ぎました。六月一日上海へ上陸して以來十六日間、愈々十七日の船で懷しの日本へ歸るべく再び汽車で上海へ向ひました。大陸も雨期に入つて霖雨が續いて居ます。この雨の爲、所に依つてはクリークの水が溢れて、水田も見渡す限りの黄濁の海になつて居ります。新聞で知つた黄河の決潰もこんなものでないかご想像されます。而も鐵道守備の兵隊さんは、雨中を歩哨に、荷役に働らいて居られます光景を見るに、全く心から感謝せずには居られません。汽車が上海の北停車場へ止まりました。南京行杭州行共に此處から乗り降りするのでありますから四回この停車場に来て廢墟に齊しい附近の景を眼にしました。

此處は皇軍苦戰の閘北の地であり、北停車場はその中心をなすものであります。頑敵云々ご當時は新聞にも報ぜられて、八月十四日から十月二十七日まで、……大場鎮の陥落するまでは退却しなかつた處だけに、上海戦線の代表的苦戰場ごも云へませう。私達はこの停車場へ来る毎に、往時の苦闘を偲びました。八階の廣壯な鐵路管理局の建物(支那軍の司令所ごなつた處)商務印書館(抗日書籍の發行された印刷工場)その附近のトーチカ、塹壕の跡を見て、如何に支那兵が抗日意識

に燃へて抵抗したか、これを攻撃する我が皇軍將士の如何に勇猛に奮闘せられたか。今は爆弾や砲弾に破壊され、焼け落されて、無慘の残骸をさらしてゐる廢墟の様に心意自ら緊張するのを覺えました。

皇師百萬、聖戦に従事して、長期抗戦の唱へられる今日、目のあたりこの現景を見た私達は、必ず内地の皆様にも出来る限りお傳へして、銃後の護りを固くしたいと思ひました。

### 歸着

六月十七日、長い間尊い體験を得た大陸の地に別を告げて、乗船長崎丸は黃濁の楊子江を下りました。

越えて六月二十日、豫定の如く私達の「富士」は午後三時三十五分東京驛へ入りこみました。

御出迎への方々、わけても可愛い我が園兒達の「園長先生、お歸りなさい」に眼底に熱いものが流れました。

# 氏原銀女史を悼む

倉橋惣三

三四

氏原銀女史、五月十九日早曉、熱海西山の別邸に於て、八十歳の高齡を以て逝かれた。老女史は實に我國保育界の先驅であつて、東京女子師範學校(今の東京女高師)の保姆見習生(今日の保育實習科の最初期のもの)の第一回生であつた。時は明治十一年、大阪府が幼稚園設置の必要を認め、その保姆としての短期養成(十ヶ月)のために、氏原銀、木村末の二人の若き婦人を遙々上京勸學せしめたのであつた。當時は東海道の鐵道もまだ無かつた頃で、東京遊學は殊に若き婦人の身に、容易のこゝでなかつた。東京女高師の附屬幼稚園は明治九年の開設であるから、まだその頃は見習生指導の途も整つてゐなかつたであらうし、その勸學は道中以上の骨折りであつたと思はれる。保育法は通辯附きで、クララ女史から學んだ譯であつた。卒業の後(明治十一年九月)直に歸阪、北區中之島府立中學校の一部に大阪府立模範幼稚園の開園準備を急ぎ、明治十二年五月、開園、その主任保姆となられた。此時は我國の幼稚園は、東京女高師の附屬幼稚園の外、殆んど時を同うして開園せられた鹿兒島幼稚園(明治十二年四月開園、今の鹿兒島縣女子師範學校附屬幼稚園の前身)と此の大阪の幼稚園とがあつたのみであつたのである。鹿兒島の方は東京女子師範附屬幼稚園保姆(即ち、氏原見習生等の指導者)豊田英雄女史(今尚ほ水戸市に鬘鏤として御健在)が、派せられて開園の任に當られ、大阪の方は氏原女史であつて、師弟して我國の二つの最初の公立幼稚園を開かれた譯である。大阪府立模範幼稚園は後廢園となり、その跡に私立中洲幼稚園が生れ(明治十六年十月)女史は引つゞきその主任であつたが、明治十七年大阪市が北區公立幼稚園を設くるこゝになつて、氏

原女史も亦私立中洲幼稚園をそのまゝ引ついで、その方に移られた。そして、ここでは、区内全小學校附屬幼稚園の設立に伴つて必要な保姆の養成にも當られた。女史の令妹膳眞規子女史は姉君と共に初めから幼稚園に勤務せられ、此の時、此の公立北區幼稚園と同時に開設せられた西區の公立幼稚園に移られたのであつて、氏原女史は北區に、膳女史は西區に、實に姉妹して大阪幼稚園の祖なられたのである。

氏原女史は晩年を令息醫學博士氏原均一氏御夫妻の豊かなる孝養の下に、氣候温かく、風光明るき熱海の別邸に悠々老を樂んでゐられたが、尙、その興味は幼稚園のこゝを離れず、屢々東京に出で、われ等の幼稚園の諸會合に妹君と共に列せられるを樂しんでゐられた。老を忘るゝお元氣であつて、若い保育實習科卒業者のためにいろいろと興味深き昔話(生きた保育史)をされ、更に朗々として詩吟なごをせられて、若者を鼓舞激勵せられたのであつた。

膳女史は先きに長逝せられ、姉君として如何にお力落しのこゝであつたらうと皆々お察してゐたのであつたが、その後は何んもなく健康もお勝れにならず、東京の會なごへもお出でがなくなり、御靜養を主としてゐられたが、御病氣を以て妹君の後を追はれたのであつた。そして、その直前まで幼稚園のこゝを考へて、御所感やお作なごも送られたのであつた。

茲に謹で、我國の幼稚園の祖なる姉妹の大保育者の靈に、心からなる敬意を表し、日本幼稚園史上に長く、記念し奉る。

(因に女史のお墓所は大阪市外蜷ヶ池圓満寺である)

# 童話 摘草と子供（絶筆）

故氏 原 鏡

三六

或る處に男の子と女の子があり、其お隣にも同じく男の子と女の子がありました、此四人の子供は毎日仲よく幼稚園に行きました。或る日曜日にお天氣がよく暖かでしたので此四人の子供は一緒に摘草に行きませうと、めいめいに籠や袋を持つて出かけました。其道の處々にはきれいに櫻の花が咲き空には雲雀がビィビィと囀つて、又黄色や白い蝶々が舞ひ遊んで居るのを見た四人の子供はあゝ面白いなあゝ喜んで元氣よく、春が来た春が来た何處に來た山に來た里に來た野にも來たさうたひつゝ行きました。やがて廣い野原に出ましたので此處で摘草しませうと言つて其處を見ますと、あちらこちらに黄色のたんぼの花や赤いれんげや紫のすみれや緑のよめ菜が澤山生へて居ますので四人は喜んで摘みましたが、土筆が一つも見付りません。つくしが取りたいなさがして居る處へ、知らない伯母さんが來られましたので四人は、あのおばさんに土筆のある

處を尋ねませうと、おばさんおばさん私達は土筆が取りたいのですがどうぞつくしのある處を教へて下さいと言ひました。伯母さんは此の山を上つたら澤山つくしが生へて居ますと教へて下さいましたので四人は大喜びで有り難うございませうとおばさんにお禮を言つて早く取りたく皆かけて山を上りますと餘り急いだので、四人は皆ころびました。おばさんはビックリして其そばへ行つて見ますと、皆膝をすりむき手をすりむいて居ますので、皆いたがつて泣くだらうと思つて居ますと一人も泣く者もなく痛いのをこらへて、ずん／＼山へ上つて行きますので、おばさんは大層感心し、皆さん強い事とほめますと四人は、私達は大きくなつたら強い人になるのですから少し位のけがは何んでもありません、先生からいつも辛棒しろと言はれて居ますのでこらへる癖が付いて居ますので何とも有りません、と言つて元氣よく山を上り澤山つくしを取つて喜んで歸りました。

# 子どもとリズム

附屬幼稚園 清水光子

幼稚園で子ぎもこの生活を始めて私がした時の大きな印象の一つは、子ぎもが何でもに拍子をつけ、ふしをつけて言ふことであつた。これは自分の幼い頃の記憶をたぎつて見れば何の不思議でも、新しいことでもないし、以來幼稚園での日を重ねるに従つてあたり前すぎる程あたり前な事になつたのであるけれど、持前の詮索好きから氣のついたまゝに手帖にかきつけて置いた。

ラヂオをみんなで聞く様になつた最初の頃「ラヂオでお話があるのよ。聞きにいらつしやいな」を呼ぶ「さつそく」○○○のくーみ、ラーヂーオ「ミ、若しこれを樂譜にかいたならば



さいふやうにうたつてお友

達を呼んだので、ラヂオさいふ所ののぼし方が面白いなと思つた。斯ういつた種類のうたは大分あるので、それから氣をつけてかきつけて見たのを書いて見る。

○○○のくーみ、—おーゆう—ぎ

(おーべんご、おーぶかき) おーしようか、等同様

—まゝごご—するもの—このゆび—さまれ  
—かくれんぼ—するもの—このゆび—さまれ  
—あしたつぎ—するもの—このゆび—さまれ  
(せんそうごつこ、おにごつこ等同様)

—せんせい—よーり—たーかー—い!  
—あしたは—てんきか—あーあめ—か—  
—ア—ラ—ラ—コ—ラ—ラ、—○○○—さんば、  
—いけな—いん—だ

この他まだく大分あるが最も普通なものはこちら等で、



英詩の韻の様に區切りをつけてみる。前のやうに區切れて、一區切りの中はみんな同じ様に強弱、強弱異なる。これ等のうたを若し譜で書くとしたら皆一拍子になる。又お友達の名にふしつけて呼ぶのをきをつけてきく四字の場合、例へば武彦チャンさいふ時は一タケヒコチャン、と言ふが清チャンさいふ様な三字名の時はキーヨシチャンさいふ様にのばす。これは「林の組おべんさう」さいふ時の一ハヤシノクームーはいが池の組になる。キーケノクームーのばすのと同じである。子ぎもは全く自由なんでもうたにし、リズムカルにするのに都合のわるい所は勝手にちよめたりのばしたりしてゐるのが私には大變に面白いと思はれた。

或時音楽の先生からドイツの子ぎもの爲の音楽の本をいたゞいたが、斯ういふのはまだ日本では見た事がない様で、興味深く思はれた。それはおたまじやくしの様な樂譜のかはりに、そのうたの繪が音符の代りをしてゐるのである。蜂のブン／＼言ふのをうたつた歌なら蜂が音の高低に従つて高く、低くさび、強弱は形の大小で表してある。子

ぎもに見せて、その繪をさし乍ら一しよに歌つて見たら、随分面白がつてよく覚えてしまつた事があつた。

## ○

或年の七夕祭りの用意で、笹をかざるいろ紙のリボンを作つてゐた時、赤、ひわ、黄、紫、さき色、等の色の紙を輪にしてつなぐのに、子ぎも達がめい／＼思ひ／＼に色をえらんでつなぎ乍ら、さの子もちやんミ繰返して色を入れてゐる様なのに氣がついたので、たしかにくり返しをしてゐるかさうか、そつさしらべて書いてみた事があつた。こちらは何色の次は何色さいふ様な指示は一切しないのに殆どさがくり返しをしてゐるのであつた。それで別の時、機會ある毎に子ぎもがつくる色、又は形の配列を書付けて置いた。それを出してみるに、さの場合も同じ様にリズムカルな配列をしてゐる。オモチャの店かざりの紙リボン作りや、おもちゃにつける模様、お人形のお着物の模様、等全然子ぎもの自由にまかせた配列で、たゞ色数だけ與へたのであるがその結果はいつも同じであるのも面白い。

例をあげるに赤白、赤緑、さき色ミ黄色の様に二色を組

合せて作った配列では、全部で材料の數七〇の中リズムミカルの配列をしてゐるのが六十一ある。そのうち九つだけが繰返しをしてゐない、即リズムミカルな配列のないものである。この數から殆きがリズムミカルな並べ方をしてゐる言へるであらう。その中には一つ一つ交互に並べたものが最も多く、次は二つづゝ交互に、それよりづつ少く三つづつの交互、更に少いのは或長さ全體をまこめて二つの繰返しをしましてゐるもの、二つに一つこいふ並べ方は六十一の中一つだけであつた。

色が三つ以上になる記録の數が少く、明確な結果が出ないけれど、三種の色の場合十四の材料の中七つは完全にリズムミカルな配列をしてゐる、残りの中四つは途中でそれがまよつてしまつてゐる。

この他、形のちがふ二種のを配列した時の記録もあるが數をあげる程でないのだけれど、これでも多數のものがリズムミカルな配列をしてゐる。

以上は横の記録のまきめ、であるが、縦に、一人の子きもについて見るに特別にリズムに敏感な子きもあるし、

反對にさうでない子きもある。そして色の場合、赤赤、緑緑、赤赤、緑緑といふ様に配列する子きもは形のちがふ場合も二つづゝ配列してゐるのは不思議な程であつた。

以上の事は全然單なるつまらない記録に過ぎないし、何か結論が出せるものであるならそのほんの門口に過ぎない。たゞ子きもがリズムに興味ある態度を示すこと、單にうたばかりでなく、色や形にまでさうであることは言へやうかと思ふ。面白く思つたので保育個人日誌の隅つこからかき集めて書いてみたのである。

選外佳作の一

河童の瓶

田中まり子

昔、河津川(伊豆ノ國河津庄)に、大變いたづらものゝ河童が住んでをりました。

或夏の日のことでした。一匹の可愛らしい小馬が、汗をぼそそ流しながら疲れた様な様子をして、川の側へミやつて來ましたが、そこに、おいしさうな、冷たい綺麗なお水をみつけるミ、さもおいしさうに、大喜びで息をもつかずゴクッくミ飲みはじめるのでした。まあそのお水のおいしいことゝ云つたらありません。唯、もう夢中で飲みつゞけるのでした。ミころが不思議なことには、暫らくするミ川の中程に白い泡がブクくくミ盛れあがつてきたかと思ふミ、そのまに何やら、黒いものが河岸目指して一目散に泳いでくるのです。それは恰度頭の上へお皿でも載つけた様な、そして眼ばかりきよろしくさせた本當に妙な恰好をした河童でし

た。そして夢中で飲んでゐるお馬の脚もミめがけて、嚙りつくが早いか、よいしょよ〜ミお水の中へ、引つ張り込まうミするのです。この突然の出来事に、驚いたの何んのミ、もうあぶなく目をまはしてしまふミころでした。さあ大變お馬は引つ張られまいミして一生懸命後足で踏んばりました。そこで兩方ミも一生懸命引つ張りつこをしてをりましたが、お馬も死にもの狂ひですから仲々勝負がつきさうありませんでした。暫らく夢中で引つ張りつこをしてをりましたが、その中段々お馬の方が弱つてきて何うやらあぶなくなつて参りました。それでお馬は何うにかして助かりたいものミ思ひ、哀しさうな聲を振り搾つて、泣き叫びました。

ミころへ恰度この川へ村の腕白小僧さん達が今日もお水へ入らうミして、手に手をミつてやつて來たのです。ミころがこの有様なので、ワイ〜云ひながら寄つてくるが早いか、皆で河童をつかまへて、ぎゅつ〜のめに合せました。お馬の喜びは何んなだつたでせう。

大喜びで喜んで行つてしまひました。それから子供達は散々河童をいぢめた揚句、しまひには頭の上に載つかつてゐるお皿の水まで掬ひミつて喜ぶミ云ふ有様でした。ミころが何うしたのか、あんなに元氣のよかつた河童が急に大人しくなつたかと思ふミ、動けなくなつてしまひましたので、子供達は不思議に思ふのです。それもその筈です。河童にミつて何よりも大切なお皿の水をミられてしまつたのですもの、さすがの河童も涙を流して謝りました。けれど

子供達は益々面白がつて囃したてるばかりで逆も助けてくれさうにもありませんので、河童も今は途方にくれてぼんやりして懐しい水の中のお家のこころなき思ひ出し、哀しみに打沈んでをりますと、こころへ通りかゝつたのが栖足寺せいそくじの和尚さん、この和尚さん云ふのが又大變情深いよい方でしたから、村の人達誰もが、この和尚さんの云ふ事なら、何んなこころでも喜んでさく云ふ有様でした。元々憐れみ深い和尚さんのこころです。之を見て黙つてゐる筈はありません。さすがの子供達も和尚さんに懇々云ひ含められて、大人しく歸つて行くのでした。

河童はみんな嬉れしく有難かつた事でせう。やがて和尚さんは河童に向ひ靜かに云ひきかせるのでした。「なう河童や、之から一度こあんな眞似をしてはならないよ。他を困らせる様なこころをすれば、自分も困る時が来るのだよ、わかつたかね」云ひますと、河童はホロ／＼涙を流しながらコックリ／＼肯くのでした。さうして本當に自分の惡かつたこころを謝り、之から二度き悪いこころはしないを誓ひましたので、和尚さんもすつかり喜んで、ニコ／＼しながら元通りに頭の上のお皿にお水を入れてやりますと、河童は大喜びで、叮嚀にお禮を云つて、嬉れしさうに河の中へ歸つて行きました。

その晩のこころです、夜も大分更けた頃に和尚さん／＼自分を呼ぶ聲にハッとして目を醒してあたりをみまはしますと、何うでせう、枕元のこころに妙な恰好をしたものが立つてゐるの

です。よくく見るにそれは河童でした。一體今時分何しに來たのだらうに不思議に思つてをりますに、「和尚さん、さぞびつくりなすつたでせう、私は晝間助けて頂いた河童で御座います。この御恩はいつまでも忘れません、ついではお禮に之なる瓶を置いてまゐりますに云つて黒い大きな瓶を置いたまゝ行つてしまひました。

和尚さんは呆氣にさられたまゝぼんやりとしてをりましたが、暫らくして夢から醒めた様に、自分に返り、よくく枕元を見直しますにちやんこ枕元に黒い瓶（瀬戸黒の）がをいてありました。

それから云ふもの和尚さんは、この瓶をお寺の寶物として大事にくいたしました。

今でもこの瓶は栖足寺せいそくじの寶物として傳はつてゐるさうです。そして不思議なことに、この瓶の口に耳をあてゝみますに、川の流れの音がサラ／＼／＼／＼きこえてくるに云ふさうです。

選外佳作の二

でんくく虫のお話

山本ゆき子

今はでんくく虫に丈夫なお家がお脊にありますが、昔々ズット昔、でんくく虫にお家のなかつた時がありました。

其の頃、廣いく野原の草の大きな葉つばの上に、でんくく虫のお母さんミかはいく子供のでんくく虫ミが棲んで居りました。子供のでんくく虫は、大變元氣の良い、お母さんの云ひなさいます事を良くきく良いでんくく虫でございました。

今日もお母さんの側で、子供のでんくく虫が蜂さんのブンくくミ唱ふお唱歌をきく乍ら靜かに遊んで居りますミ、雨がポツンくくミ落ちてきました。子供のでんくく虫は、オヤ雨が落ちてきたミ頭を抑へお臀を抑へましたが、やつぱりかゝります。でんくく虫は悲しさうに

「お母さんくく又着物が濡れてしまひますどう致しませう」云ひました。お母さんは

「早く葉のかげに隠れなさい」「云ひなさいましたので、子供のでんく蟲はすぐ葉のかげに隠れ雨の止むのを待つてゐました。

子供のでんく蟲は

「お母さんく蛙さんにも蜂さんにもお家がありますのに、何故僕等にお家がないのでせうね、僕等にもお家が欲しいね」

「お母さんに云ひました。お母さんは

「さうね、いつもお母さんも思つてゐるのだけれ共神様がくださらなかつたから仕方がないのですよ」

「お母さん、神様つて何處にゐらつしやいますの？」「云ひました。お母さんは

「神様つてね、高いく天にいらつしやるのですよ」

「お母さま其の高いく天へどうして行かれるのでせうね」

「高いく天へはね、葉のお窓からのぞいてごらんさいホーラ向ふに摺鉢の様なお山が見えるでせう、其のお山の一番高い木がありません、雲にまぎれてゐる様です、其の木から行かれる云ひますけれどね、遠い高いものですから誰も行つたものが無いのです」「云ひなさいました。でんく蟲は、



「お母さん、天へ行つて神様に頼んできてもいゝでせうね　お母さん」云ひました。お母さんは

「あのねお前も知つてゐる通り、私達は足が遅いでせう　それに非常に遠いからこゝても行かれませんが　お止めなさい」……

「でも僕ごんな目に遇つてゐても、僕達にお家をおかします様つてお頼みしてきたいのです　行つてもいゝでせうねお母さん」云ひました。漸く立つてお母さんは

「それでは行つて神様にお頼みしてゐらつしやい。けれ共お道はつらいのですよ、そうして、ごんなお友達に遇つても道草せず自分のお足で行つてくるのですよ」「ハイ」僕も日本にゐるでん／＼蟲だお母さんのおつしやつたおいひつけを守つて、さうでもお頼みしてこねばならないと元氣を出して

「お母さん行つてきます」云つて、大きな葉の上から下りて、彼の高い山を目あてにノソリ／＼一心に歩き出しました。少し行きましたら、足が疲れましたので葉かげに休んで居りました。そこへ蟻螂さんが

「でん／＼蟲さん暫くでしたね／＼いらつしやいます」「云ひました。でん／＼蟲は

「彼の高い／＼お山へ行きます」「云ひました。する／＼蟻螂さんが

「そうですね、お山も良いけれど、彼の向ふの畠にいても面白い事があるのですよ、一緒に見に行きませう」云ひました。でんくは「お母さんが道で遊んでいけない」云つしやいましたから云つて、蟻螂さんご別れてズンく行きました。廣いく田圃へ出ました。向ふから、ピョんくは蛙さんが來ました。蛙さんは、でんくは蟲さんに

「でんくは蟲さん何處へいらつしやいますか」云ひました。でんくは「彼の高い」お山へ行きます」云ひました。蛙さんは「それは遠い事ですね、私が負ふて行つて上げませう」云ひました。

「蛙さん有りがたうね、けれ共お母さんがみんなにつらくつてもお歩きなさい」云つしやいましたから云つて又ノソリくは歩き出しました。少し行つて木の根で一寸休んで居ります、そこへブブブーンは蜻蛉がきました。そうして、「でんくは蟲さんそこへいらつしやいますか」云ひました。「あの高い」お山へ」云ひました。

「ア、彼の高いお山でござい、ますか、ではお脊におのりなさい、飛行機の様にして行つて上げませう」云ひました。

「蜻蛉さん有りがたう、飛行機の様にしては、行つて欲しいのでござい、ますが、お母さんから歩いて行く様に云はれましたから」云つてズンく行きました。するに大きな川がありまし

た。ア、困つた、こんな大きな川は渡られないし、——を考へてみました。そこへ龜さんがヒツコリ川の中より顔を出しました。

「でんく、蟲さん今日は、何を考へてゐなさいます？」と云ひました。「私は此の川を渡りたいのだけれ共、橋が無いから困つてゐると云ひました。」

「其れでは私の甲羅におのりなさい連れて行つて上げせまう。」と云ひました。

「有難う、けれ共お母さんが歩きなさいとおつしやいましたから歩いて行き度いのでございませうが何卒橋のある所を教へて下さい。」と頼みました。龜さんは教へて下さいましたので龜さんにお禮を申して龜さんと別れて橋を渡り、だんくお山をさして登りました。辛い事、々々、何度も、もう止めてお母さんの傍へ歸らうかと思ひましたが、元氣を出して登りました。山の峯につき、木にのぼりさうく天へ上りました。でんく、蟲は、天へ上られましたので、大へん喜びました。そうして遙か向ふにいられます神様の所へ参りました。でんく、蟲は神様に叮嚀にお禮を致しました。「神様御ねがひがございませう何卒僕達にもお家を戴けます様に。」とお願ひ申しました。

するま神様は「此の様な遠い所へよく來ましたね、……そうしてお友達がありましたか？」と優しくおつしやいました。

「お友達はありません。僕獨りで一生けんめいに來ました」を申しました。神様は、大そうおほめ下さいました。

「それでは、良いお家を上げやう」をおつしやいまして、でん／＼蟲に脊中を神様の方へ出せを仰せられましたので、おつしやいました通り出しますを、神様は「丸」「丸」を人さし指でグル／＼形を脊におかきになりました。する／＼丸いお家がでん／＼蟲の脊に出來ました。

そうして神様は「でん／＼蟲の子供よ、あなたはお母さんの申された通りを守つて來ましたから、ごんなに疲れたらう、今すぐお家をつけたまゝお母さんの許へかへして上げませう。目をつむりなさい」をおつしやいましたので、お目目をつむりますを、體共にスー／＼なつた様に思ひました。する／＼お母さんの

「おかへんなさい」を云ふ聲がきこえましたので、吃驚して目を明けますを、廣い／＼野原の、元の葉の上です。お母さんはニコ／＼して「良いお家を戴いてきましたね」をおつしやいましたので、嬉しくて思はず體を伸しますを、良い丈夫なお家から體がスー／＼出ました。そうして歩きます時にもいつも此の良いお家が來ました。

でん／＼蟲さんもお母さんもごんなに嬉しかつたここせう。

神様が高い／＼天より落しなさいしてもこはれない様な丈夫なお家がこれである様になりました。

選外佳作の三

狸とお團子

石堂 トヨ子

そよ／＼春風が青草の上を優しく撫でゝ行きました。つくしがすつく背伸びしました。たんぼ／＼がつこり微笑みました。狸さんは自分のお家である穴から這出してきました。そして柔くて、暖かくて、良い香りのする嫩草の上に寝轉びながら考へ込んでみました。時々、太い尻尾を撫でゝるますのは昨日、お山の小僧さんに引つ張られた時の痛みがまだ治らないからでした。可哀想に所々少し毛がぬけておりました。

さうかして仇討がしたい。本當に生意氣な小僧だまでよ、ひよつこするこ、昨日のお團子が残つてゐるかも知れない。そう／＼仇討を後にしてもそのお團子だけは。こ思ふこ矢も楯もたまらなくなつて、ぴよんこ飛び起るこ大急ぎでお山の方へ歩き出しました。森の入口にさし

かゝりました時、向ふから仲間の狐さんの歩いて来るのが見えましたので今度は散歩の時見たいにゆつくり歩きました。

狐「やあ、狸さん今日は。ごちそう〜」

「うん僕お散歩してるの〜何げなく云ひましたが狐さんが自分の毛の少しぬけた尻尾を不審さうにじろく〜見ますもので、極り悪くなり」さよならッ」云ふが早いか馳出してしまひました。

暫く走つてから、狐さんが後を追かけて来やしないか返返つて見ましたが、そんな様にも見えませんので安心して歩き出しました。お山のお寺に着いた頃はもうお晝も大分過ぎた、お八つの時間に近い頃で、狸さんのお腹が丁度良い塩梅に空いてゐました。

お寺の中はしーんとして、本堂の前は全部開けはなしてありました。きつこ、小僧さんはお習字でも、和尚さんはお晝寝でもしてゐるのでせう。本堂から和尚さんの居間の方に續く長い廊下は人影もなく、櫻の花のそよ風にひら〜散る音が聞えるかと思はれる程の静けさで御ざいました。狸さんがそろつこお縁側に上つて見ますこ、あみだ様の前のいろ〜なお供物の中に混つて、大きなお皿にたつた一串、お團子がのつて居りました。狸さんは、占めたと思ひながら靜かに靜かに疊を歩いて行きました。丁度五つか六つ歩いた時廊下に足音がしました。狸

さんは驚いて大急きで香爐に化けました。そして、本當の香爐の置いてある下の段に坐りました。本堂に入つて來たのは昨日の小僧さんでした。小僧さんは何か取りに來たのですが香爐が二つあるここには氣が付かず、唯、お皿の上のお團子をぢろつこ見たゞけで、又さんく足音させて向ふへ行つてしまひました。あよかつた、と思つて、又元の狸の姿にかへり、段々をそろりく上りました。お團子のお皿は生憎一番上の段にあつたからです。お皿ののつてゐる段の上にもよこん坐つてお團子を取り上げ、先づ堅くなつたかぎうか指で押して見ました。少し堅くなりましたがお腹の空つた狸さんには美味しさうに見えました。ごくりさつばをのみ片方のお手々を頬ぺたが落ちない様に抑さへながら、まさに食べ様さしました時、又廊下に足音がしました。戸が開けはなしてあるものですから、逃げだせば直ぐ見付かつてしまひます。狸さんはお團子をお皿に置くにすぐ、自分もお團子に化けて一諸にお皿にのりました。本堂に這入つて來たのはさつきの小僧さんでした。小僧さんは持つていつた物を置きに來たのですが、又お皿のお團子をぢろつこ見ました。そして不思議さうな顔をして立止りました。

そうせう。さつきまで一串だつたお團子がちよつこの間に二串になつてゐるんですもの、小僧さんはぢつこお團子を見てゐましたが、さうく背伸びして手を伸して一串さりました。そしてあぐさ一つ串から引込ひっこぬいて食べました。少し堅くなりましたが小僧さんにさつては

とても美味しゆう御座いました。アグリ、ムシヤク、あぐり、ムシヤク、あぐり、ムシヤク、串から皆、引込ぬいて食べて仕舞ふさ、最後に串をペロリさなめて、ボールを投げる時見たいに遠くの方へボーンミ投げてしまひました。もう一串を皿の真中へ置きかへるさ、口ばたを、袖でつるりさふいて何事もなかつた様なかほをして廊下をさんくミ行つてしまひました。幸せなごさには、小僧さんの食べたお團子は、狸さんの化けた方ではなく本當のお團子の方であつたのでした。小僧さんの登音が消えるさ、狸さんはぴよんミ一足飛にさび下り、目散に逃げ歸りました。さつき寝轉んだ青草の上にべたんミ坐つて、はあく息を切らして、さざれく獨言を云ひました。

「本當に 危なかつた お山の 小僧さんには とても とても かなはない」さ 春風が少し毛のぬけた太い大きな尻尾をそよく撫でゝ通りました。



## 選外佳作の四

# 雪のトンネル

桂 本 美 枝 子

雪のたくさん降る北國の田舎のお話です。曉美<sup>あけみ</sup>さんや惠子<sup>えいこ</sup>ちゃんのおうちも、お山も田圃もすつかり雪をかぶつてしまひました。

お晝御飯を<sup>ごちさう</sup>きましたました惠子ちゃんはスキー帽をかぶつて小さな赤い手袋をはめるこ、長靴をはいて、小さなバンバコ(雪掻き)を持つて外へ飛び出してきました。そして綿の様にふはくした軽い雪をバンバコでサブツサブツ真四角に切つてお豆腐の様にするこ、そのお豆腐をバンバコにのせて、一まころへ積み始めました。そしてバンバンと固く叩きつけてるますの。

積んではバンバン、積んではバンバン、その音は真白な野原の向ふのお山の上になで響いていつたのです。

惠子ちゃんは遂々、雪のお山を造り上げましたよ。お山には椿の葉や梅の小枝を差し込んで木が生えてゐるのにしましたの。するこ

今度はお山のおなか(腹)の處をまん丸に穴をあけました。そして、ソオートツミお山が崩れな  
い様に、向ふ側まで穴をあけてトンネルを造りました。するこおうちからこの間お父さんに買  
つて貰つた汽車を出してきて、トンネルの中をくぐらせますの、汽車についてゐる長い紐をト  
ンネルの中へグウツミ入れるこ、向ふ側に廻つて、

「皆さん、トンネルですからお窓をしめて下さい、ポー、ゴッコチャッチ、ポッポシユツシユツ  
と元氣よく言つて面白さうに幾度もくぐ、トンネルをくぐらせて遊んでゐました。するこ、

「惠子ちゃん、構しないかい」

勢よく構を曳きづつて走つて来たのはお隣の曉美さんです。

「えへ、致しませう」

「惠子ちゃん、僕にも乗せて呉れないよ嫌だよ」

「いゝだよ」

さう言つて惠子ちゃんは構の上にきちんとお坐りして、二つのお手々で前の方にしつかりつかまりました。曉美さんは、

「いんよ、ボ」

後向きうしろむきになつて、うーん　うーんを曳つぱりしました。二三回、ズルッ・ズルッを滑つたか

思ひますぞ、曉美さんは

「もうこれでいゝだらう。さあ今度は僕の番だよ」

さう言つて構に乗つてしまひました。

恵子ちゃんは、仕方御座居ません

「曉美さんたらこすいわ」

さう言ひ乍ら今度は恵子ちゃんが曉美さんの様にしてカ一杯曳つぱつてみました。けれど、

少しも動きません。

「おい、早く行き給へよ」

「でも動かないんだわ」

「なんだ、つまらないな」

曉美さんは、ぶつ／＼言ひ乍ら降りてしまひました。

「恵子ちゃん、お山へ行かうよ、山だつたら曳つぱらなくても二人も一しよに滑れるよ」。

「あゝそれがいゝわ、行きませう」

二人は構を曳きつづつて恵子ちゃんのおうちのすぐ横の道から登りかけました。大分登つたと思ふ頃、恵子ちゃんは少し疲れてきました。

「曉美さん、少しお休みしない？」

「何だ、羽蟲だなー」

でも二人は構に腰をかけてお休みしました。見渡す限り一面の銀世界です。そして時々お日様が雲の中から、ひよこりお顔をおだしになりますので、急にぎら／＼つまばゆくなります。あたりは物凄い程の静けさです、奥山の方で山鳥がばた／＼つみしたかと思ふと又すぐに元の様に静まりかへつてしまひます。

お休みした恵子ちゃんは元氣一杯になつて今度は先にたつて、きつ／＼登つて行きました。少しばかり登つたかと思ふとさうでせう。びつくりしましたよ、恵子ちゃんの眼の前には素晴らしい雪のトンネルが奥深く通じてゐるではありませんか、

「曉美さん、雪のトンネルが！」

「えつ、あれ、本當に！ やあ！」

「だから僕が山へ行かうつて言つたんだよ」

さう言ふと曉美さんはトンネルの中へ、ぎん／＼入つて行きました。



のです、それからミても暖かいのです。向ふの山には淡い霞がかゝつてゐます。そしてその廣  
い緑の野原の真中には美しい小川がさら〜流れてゐるのです。兩岸には土筆の兵隊さんが、  
づら〜つみ竝んでゐます。その中に交つて可愛い、董のお嬢さんがま〜ごご遊びをしてゐらつ  
しやいます。そしてその他の色々の美しい花も咲き揃つてゐます。櫻の花も土手をに沿ふて咲き  
亂れてゐました。空にはさつきから雲雀が、ピーヒヨロヒヨロ、ピーヒヨロヒヨロ囀つてゐます。  
二人は餘りの美しさにみされてゐますミ、向ふの花の中から二匹の小馬がバカバカ〜や  
つて來ました。やがて二人の前までやつてきますミ、

「冬の國のお坊つちゃん、お嬢ちゃん、さあ〜早く私達にお乗りなさい、これから春の國を  
御案内致しますせう。

ミいつてくるりミ向きかへりました、二人は大喜びにおんまにひよいミ跨りました。

おんまは土手の上を軽く歩き始めました。歩く度に轡につけた鈴がシャンシャン〜この  
さかな春の空氣を動かして行きます、小川の中にはメダカさんもス〜ス〜泳いでゐます、  
そのうちにおんまがさまりました。其處にはお髯を生やしたにこ〜顔のおぢちゃんが何か大  
きな袋にもたれて暖かい光を身一杯に浴びながらうつら〜ミしてゐます。おんまの來た音に  
眼を覺ますミ

「おや〜これは〜、冬の國の坊ちゃんとお嬢ちゃんですかい、よくきておくれた、此處は春のお國だよ、おぢいさんは春の國のおぢいさんなんだよ、そうらそこにブランコもあるし、お滑り臺もあるし、自動車もあるしおんまもあるし何でもしてゆつくりお遊び」

「おぢちゃん、おぢちゃんは春の國のおぢちゃんかい、春の國つて何時でもこんなに暖かいのかい」

「あゝさうだよ、いつでもこんなにのんびりしてゐるんだよ」

「おぢちゃん、春の國つていゝのね、おぢちゃん、おぢちゃんの、もたれてゐるそれはな〜に」  
恵子ちゃんはおぢちゃんがさつきから大事さうにしてゐる大きな袋が氣になつて堪りませんのでたづねてみました。

「アハ……これですかい、これは霞の袋と言ふんだよ、おぢちゃんがね、この袋の中から少しばかりの霞を出すにすぐになんかにのさかな春になるんだよ、

「まあ、霞の袋つて言ふの、いゝわね」

「おぢちゃん、そんなにいゝ霞だつたら僕達に少し呉れないかい」

「アハ……こんなもの持つて歸つてきうするんだね」

「おぢちゃん、僕達のミこころも早くこんなに暖かい春の國にするんだよ」

「おゝ そーかい、それでもね 坊ちゃん、この袋は何時なんときでもあけてはいけないんだよ!。」

そーら あの空におてんごさまがいらつしやるでせう あのおてんごさまがね、あけてもいいよつて仰有るまではあけちゃいけないんですよ。」

「なあーんだ つまらないなー」

「おぢちゃん、私達のところへも来るの!」

「あゝいきますごも いきますごも もうすぐいきますよ」

「おぢちゃん、私達のところへ来る時何に乗つてくるの」

「あゝくゝ嬢ちゃん嬢ちゃん達の處へ行く時ですかい、これから汽車に乗つてね、それから雪のトンネルをくゞつて、それからお山を降りてゆくんだよ」

「あゝ嬉しい もう幾つねるさ来るの」

「そーだね もう二十程ねたら行くよ」

「おぢちゃん も二十ねたら来るの 僕達お山までお迎ひに来てあげるよ」

「あーあー ありがたう そうくゝ もう大分夕方になつてきたね、お歸りにしませう、さつきのお馬に乗つてね」

春の國のおぢちゃんはこゝ言ふこゝ又うつらうつらと眠り始めました、二人はおぢちゃんに左様な



らをしておんまに乗りました。そしてさつきの汽車のまごころまでくるま驚きましたよ。もう汽車も雪のトンネルもありませんでした。二人は

「おあつ」。

「おあつ」。

と言つて可愛いお目をくるく／＼して驚きました。あたりはやつぱりまごの様に一面の眞白な銀世界です。二人はおうちへ急いで歸るまお父さやお母さんに今日あつたお話を致しました。

それでも恵子ちゃんも曉美さんはそれから二十おねんねして、あの春の國のおぢちゃんをお山までお迎へにゆくのを待つてゐましたま。

## 御紹介

### ジエレミー 一幼児の生ひ立

小主人公ジエレミーは七歳から八歳に  
つた。八歳になつたその日の朝、自分はや  
つぱり昨日と同じジエレミーでちつとも變  
つてゐないといふ事を知つてひどく落膽す  
るところからこの物語は始つてゐる。

牧師で教區長をしてゐる忙しい父親と、  
溫和で福々しくて、何事にも心を亂された  
事の無い母親と姉や妹と、叔父さん叔母さ  
ん、そいふ家庭に育てられた。

彼が始めて學校に行かうとする前の數週  
間は生涯の中で最初のほんたうの獨立生活  
の豫想で雄々しく振舞つてゐた。それ迄の  
間にいろいろの事がある。例へば世間知ら  
ずで痾癩持ちのばあやとの別れ、これに代  
つて傭はれて來た家庭教師對子供達とのい  
きさつ、ジエレミーが英雄と思つた船長が  
海賊の頭であつたこと等々。その中色刷の  
ポスターで、町へ曲馬團や芝居のかゝる廣

告が出た時彼はそれを見ないわけにはゆか  
なくなつた。貯金箱の蓋をあけた。もし  
てたう／＼馬に乗つて見た。この事がお父  
さんに知れたが、その場面があんまり教化  
的で無かつたので、折かくのお父さんの正  
しい心はちつとも息子の心に觸れることは  
出來なかつた。その中たう／＼學校にはい  
る爲に家族のみんなとお別れをする時が來  
て、いつでも落ちついてゐて、彼の思つて  
ゐる事をちやんと察して適當に振まつてゐ  
るお母さんとの別れは一番つらく感じた。  
かういふ筋である。

この作者英國のウォルポールは好んで少年  
の物語をかいてゐた、そして事實その小説  
は自分の少年時代を反映したものが多くい  
ふ、ジエレミーこの少年物語も正直で眞  
面目な子供の心と鋭敏な神經の働をを前述  
のようないろ／＼の出來事にことよせて、  
面白く示してゐる。かうした幼い者の眼に  
映る大人の姿がどんなものであるかを卒直  
にかいてゐるので、すつかり忘れてしまつ  
た幼年時代のこゝろ持ちが甦つてきたよう  
に思つてよみ終つた。

### ケイティー 一少女の家庭生活

十二歳になる少女の家庭生活を、それも  
ある短い期間の描寫であつて、出てくる人  
物の心持や態度などからその少女の全貌を  
描き出すと云つたふうにならぬ。生ひ立  
ちとか思ひ出とかいつたものとは多少違つ  
てゐるようである。

少女の父は醫者、兄弟は四人、母は天死  
してしまつて、イーシー叔母さんがみんな  
の身の廻りの世話をする、といつた家庭。  
一篇の主となつてゐる點は、道德觀の養は  
れてゆくことで、それをケイティーがいろ  
／＼の出來事の中で知らず／＼感じたり養  
はれたりしてゆく過程をうまくとり込めて  
ゐる。

父はイーシー叔母さん任せではあるが、  
忙しい家業のひまに一寸歸つて來た時に、  
又來客のあつた時などに折々子供達と一緒

ウネルギール作 一三〇  
西田琴譯 岩波書店

になる。いつも温くて寛大なこゝろで子供等に接してゐるが、父の言葉は、知らず／＼

そう従はないでは居られない正しさを持つてケイティーの心に觸れていつた。叔母さんのいふ言は、一寸聞きたくないやうな誠しめが含まれてゐるので、折々子供達との間に葛藤を起すことがあるが、そのいふ通りに行はないと實際では困ることを屢々経験するので、しまひにこの叔母さんが亡くなつてしまつて大變みんなが後悔する。

この間に子供らしいいたづらが度々行はれたり、ケイティー自身も一寸した不注意で長い病氣をしたり、いろんな目にあつてからその上で、少女らしい分別が自分の力から出てくるようになる、例へば、或るいたづらの自白を迫られた、そうしてほんとうの事を云つた、「今迄よりも一層恥しい思をして、でも何かしらホツとして席につきました。本當の事の中には何かホツとさせるやうなものがあつて、一番困つてゐる時でもそれが本當を云ふ人を助けてくれます。ケイティーはこの事を今知りました」とい

つたようなことがところ／＼に示されてゐる。

作者はあめりかのスーザンクリッチ、數ある作品の中の代表作である。

クリーリッチ作 一、二〇

尾高京子譯 岩波書店

### 一老人の幼児の追憶

ドイツの畫家が自分の幼少時を書いた自敘傳である。

いろ／＼の出來事が澤山に出てくるので、こゝにどれをとり出してといふ代表的な部分を抜き書きするのが困難であるが、滿三歳頃から記憶がはつきりして來たその中で、母の事が屢々出てくる。良妻賢母の母に世話されるのを幼い頃から非常に喜び、母は又、めつたに罰しないで、悪かつたと自ら思はせるように常に導いてゐた。

時代が丁度十九世紀の初め、あのナポレオンの世界的事件の最中であつたから、著者が戦ひの渦中に居て、家に兵士が泊つたり、町に兵士が行軍したり、武器が相つ

で送られたり、それらを目撃してゐて大人の見方とは一向お構ひなしに、思つたまゝの記述が終りの方に大分精しい。従つて背景によつてわれわれが西洋史では習はなかつた興味ある事實をはからずも知つたわけであるが、それよりも、幼少者の心にそれらの事實が如何に觸れていつたかを知つたのは最も大きな收穫といつてもよいと思はれる。

この書がすでに明治四十四年に出版されてゐたものであつて、今度かうした事變時に於いて普及版になつたその意圖から暗示されたといふ感が深い。

キネーゲルゲン著

四〇

伊原 元治 田中耕太郎 岩波  
大澤 幸 上野 勳 譯 書店

# ハイディ

イ (第五回)

東京女子高等師範學校教授

津田 芳雄 譯

ハイディは戸をあけて、小さい暗い部屋に入った。そこには爐が一つ、木の棚の上に皿が三四枚置いてあるばかりだった。この家の臺所だったのである。それから又一つ戸をあけて、奥の矢張り小さい部屋に入った。この家はおぢいさんの山の小屋と違つて、萬事が手狭で、みすばらしい古い古い家だったのである。入口の間近に机があつて、一人の女のひまが、見おぼえのあるペーテルのちよつきにつきをあてゝゐる。隅の方に腰のまがつたおばあさんが糸をつむいでゐる。ハイディはこれが屹度おばあさんだらうと思つて、そばによつて云つた。

「おばあさん、今日は。あたし、やつこ来てよ。」

「随分待たしたでせう。」

おばあさんは顔をあげて、ハイディの差出した手を手さぐりして、探してたら、それをなで廻してから

「お前がアルムをぢさんの所にゐる子かい、ハイディさんかい。」

「さうよ。おぢいさんに今、構に乗つけて来てもらつたところよ。」

「そんなこゝがまさか。おや、でも暖かい手をしてゐるね。ブリギッタや、アルムをぢさんがこの子をつれて来たのかい。」

ペーテルのお母さんは仕事をやめて、立上つてゐるが、この時ハイディを頭から足の先までじろ

く見ながら云つた。

「おちさんが自分で来たのかさうか、わたしは知らないけれど、そんなこころがあるでせうか。この子がなにか間違へてゐるんでせう」

「だつて、おちさんがわたしを布團にくるんで、構に乗つて来たんだもの」

「それぢや、夏ペーテルが話したこころはほんまなんだね。それにしても嘘のやうな話だよ。この子は三週間ミ山には續くまいと思つてゐたのに。さんな子だい、ブリギッタや」

「おばあさんは尋ねるミブリギッタは、

「アデライデのやうにすらりミしてゐますよ。眼の黒いミこころや髪の毛のちやれてゐるミこころはお父さんやおぢいさん似よ」

ミ、目の見えないおばあさんに云つて聞かせた。そんな話のあつてゐる間、ハイディはぼんやりはしてゐなかつた。彼女は部屋を見廻して、中にあるものをみんな注意してゐたが急に大聲を出した。

「おばあさん、雨戸が一枚ぶら〜になつてゐて

よ。おぢいさんだつたら釘を一本打つて直ぐになほしてしまふのに。でないミガラスがこはれるから。御覽なさい。ほら、がたん〜云つてゐるでせう」

「あー、ハイディさん。わたしには見えないんだよ、だけミその音は聞えるよ。雨戸ばかりぢやない。この家のものは何もかもがた〜でね、風の吹く時は大變なんだよ。夜中にほかの二人が眠つてゐてもわたしだけは眠れないこころがある。家が今につぶれて、わたしたちが死んでしまひさうでね。だけミ、誰も繕つてくれる人はない。ペーテルにはそんなこころまだ出来ないしさ」

「だつてさうしておばあさんにはあのぶら〜してゐる雨戸が見えないの。それ、御覽なさい。またがたんミ行く。あの戸さ」

さう云つてハイディはその雨戸を指した。

「あー、ハイディさん。雨戸ばかりぢやないんだよ。わたしには一切が見えないんだよ」

「おばあさんは悲しさうな聲で云つた。

「だつて、わたしが外へ出て、あの雨戸をこめて来て、部屋を明るくしたら見えるでせう。」

「いや／＼それでも駄目。誰もわたしの目をもう明るくすることは出来ない。」

「でもその白い雪の中に出たら明るいでせう。ちよつと来て御覽なさい。わたしが見せてあげるから、おばあさん」

ハイディはおばあさんの目にあかりが無いと思ふに悲しくなつてきて、おばあさんの手をこつて引張つて行かうとした。

「ほつといておくれ、いゝ子だから。わたしにはいつも暗闇ばかりなんだよ。雪の中に出て、日なたに出て、わたしの目に光が入ることは無いんだよ」

それでもハイディはこの悲しいこゝを何ミかのされる方法はないか頻りに色々のこゝを尋ねたけれど、結局「わたしにはもう、この世で光は無いんだよ」とおばあさんに聞かされて泣き出してしまった。ハイディは滅多に泣かないけれど、泣き

出したらなかく／＼やまなかつた。それでおばあさんはそれをなだめるのが大變だつた。おばあさんもハイディにかうして泣かれるのが辛いので、こゝろさうかう云つた。

「さあ、ハイディちゃん、目が見えないと、やさしい言葉がみんなに嬉しいものか、お前にはわかるまい。わたしにはお前の話を聞くのがとても楽しいんだよ。だからこゝへ腰を下して何か話しておくれ。お前、山の上でさうしてゐるの、また、おぢいさんはみんなこゝしてゐるの。昔のこゝはよく知つてゐるけれど、もう長いこゝあの人の様子を聞かないから。ペーテルからは時々聞いたけれど、あの子はあまり物を言はない子でね」

これでハイディはいゝこゝを思ひつかせてもらったので、直ぐに涙を乾かして、今度はおばあさんを慰めて云つた。

「わたし、おぢいさんに何もかも云つてよ。それまでおばあさん、待つてゝね。おぢいさんが屹度おばあさんの目をなほして下さるわ。そして家も

倒れないやうに何さかして下さるわ。おぢいさんは何でもおばあさんのもの、なほして下さるわ」

おばあさんはそれに對しては何さも云はなかつたが、ハイディはそれからおぢいさんご自分の生活の様子を上手に話し出した。山羊たちご山で暮した日のこと、冬になつてからの毎日のこと、おぢいさんが鹽やお椀やスプーンまで何でも手まめに上手に拵へること、それをまた自分がそばで眺めて面白がつてゐることなど、いよく興に乗つて話しつゞけた。おばあさんはじつごそれに聴き入つて、時々娘にかう話かけるだけだつた。

「ブリギッタや、聞いたかい、今のをぢいさんの話を」

そこへ戸口に重い足音がして、ペーテルが歸つて來た。彼はハイディを見つけて眼を圓くして驚いた。それからハイディに「ペーテル今日は」ご云はれてにつこりした。

「おやもう學校がひけたのかい。今日みたいに早くたつた午後はない。ペーテル讀方は進んだかね」

おばあさんが尋ねるご、

「おんなじご」

さいふ答である。おばあさんは溜息をついて「もう、ちつごは違つたごごを云つてくれる時だご思つたのに。この二月には満十二になるぢやないか」

「もうちつごは違つたごごつてなあに？」

ハイディがまた尋ねるご、おばあさんはかう云ふのだつた。

「もう少しは字が讀めなくちあならん時だが、ご云つたのさ。あの棚の上に古い祈禱書があるが、その中に美しい歌が幾つも書いてあるんだよ。わたしは久しうそれを聞かせてもらはないから忘れてしまつて、自分で云つてみるごごも出來なくなつた。その一つでも時々讀んで聞かせる位にはペーテルが直ぐになつてくれるだらうご思つてゐたのに。この子はまだなんにも讀めないんだよ」

そこへまだチョッキのつくろひをしてゐたペーテルのお母さんが

「ランプをつけませう。暗くて見えなくなつて來

たから。わたしも今日のお晝からは随分短かゝつたやうに思ふわ」

ミ云つた。するにハイデイは急に立上つて直ぐミおばあさんに手を差し出しながら

「おばあさんおやすみ。暗くなつて来たからわたしもう歸るわ」

ミ云つて、ペーテルミそのお母さんにも「さよなら」をして戸口に向つた。おばあさんは

「ハイデイちゃん、ちよつとお待ち。そんなにひそりで行つちやいけない。ペーテルや、送つておいで。ころばないやうにね。じつミ立たしちやいけないよ。凍えるこいけなから、いゝかい。頸に巻くものはあつたかね。」

ミ色々心配した。

ハイデイは「無いけれど寒くないわ」ミ云つて家から駆け出した。ペーテルもそれを追ひかけて跳び出した。けれどおばあさんはまだ心配。

「ブリギッタやハイデイを追掛けておくれ、あの子、こんな晩に、凍えてしまひさうだよ。さあ、

早くこのわたしのショールを持つて行つておくれ」

ブリギッタは駆け出した。が子供たちが五六歩も行つたか、ミ思ふ頃おぢいさんが迎へに山を下りて來てゐた。

「あー、よろしい。約束を守つたね、ハイデイ」

おぢいさんはさう云つて、ハイデイを麻の大袋にすつかり包んでから、抱き上げて、その儘すたゝ山を登つて行つた。ブリギッタはやつミこの様子を見るのに間に合つた。そしてペーテルミうちに入つておばあさんにその驚いた話をした。

おばあさんも同じやうに驚いて「神様、あの人があの子にそんなにやさしくしてくれるこミを感謝致します」を何度もくり返した。それから「をぢさんはまたあの子をこゝへ來させてくれるか知らん。本當にあの子はわたしを慰めてくれたよ。なんて可愛い心をしてゐる子だらう。あの子の話を聽いてゐるミ本當に面白い」ミ云つて寢床に入るまでハイデイのこミを欣んだ。寢床の中でまで「また



来てくれるさいよが。まだこの世はあきらめたものでなかつた。楽しいことが残つてゐた」云つてゐる。ブリギッタもそれに合槌をうちペーテルも一々おばあさんの言葉にうなづいて見せて「僕がさう云つたらうが」嬉しさうに大きな口を開いて笑ひながら云つた。

一方、ハイディは袋の中から頻り何かおぢいさんに向つてしやべつてゐるが、頭から包まれてゐるので少しもそれが分らない。それでおぢいさんは

「うちに着くまでお待ち。うちでみんな聞かせてもらふよ」

云つてだまらせた。所がうちに着いて包から出されるが早い、ハイディは

「おぢいさん、明日わたしたちは槌さ長い釘を持つて行つて、おばあさんのうちの雨戸を打ちつけなくちやいけないわ。また、ほかにも方々釘を打たなくちやならないわ。おばあさんうちは家中がたくで揺れるから」

「さうぢやさうするかね。だが誰がさう云ひつけたんだね」

「誰も云ひつけたんでないの、だけき家がくずれさうだもの、おばあさんは晩、眠れない時はひびい音がしてゐて、家が今に頭の上に落つこちて来さうで、がたく震へていらつしやるんだつてよ。それにおばあさんは目が見えないのよ。何もかもまつ暗だつてよ。可哀想ね。誰もおばあさんを明るくして上げることは出来ないさおつしやるの。」

だけおぢいさんには直してあげるこぎが出来るでせう。明日行つて直してあげようよ、ねえおぢいさん」

子供はおぢいさんにしがみついて信用しきつたやうな目でおぢいさんを見上げてゐた。おぢいさんは暫く何さも云はないでその目を見下してゐたが、やがて

「さうだ。ガたくいふ音の方は止まるやうにしてみよう。せめてそれだけは出来るだらう。明日下りて行かうね」

子供は悦んで部屋を跳び廻つた。

「明日行くのね、明日行くのね」

おぢいさんは約束を守つた。翌日の午後になつて、櫛を引出して来て、前の日のやうにおばあさんの家の戸口でハイディを下して、

「さあお入り、暗くなつたらまた出てくるんだよ」さう云つて、麻の袋を櫛に入れて、家の外を廻つた。

ハイディが戸をあけて部屋に跳び込むが早いか、おばあさんは隅の方から

「あー、来てくれた、来てくれた。」

ミ悦んで糸も紡車もほつて、両手を差出して迎へた。ハイディは走りよつて、腰掛を引よせ腰を下して早速、いろんなこ話を話したり、訊いたりし出した。するミ、突然、小屋の壁にがたん／＼いふ響がした。おばあさんはびつくりして、聲を震はせて、

「あー、大變だ、家がよく／＼くづれて来た」ミ叫んだ。けれどもハイディがおばあさんの腕をミ

つて、

「いえ、いえ、怖がることはないのよ、おばあさん。おぢいさんが槌を使つてゐる所よ。そんな心配がないやうに、おぢいさんがあちこち直してゐるだけよ」

ミ云つて宥めた。

おばあさんは「まあ、本當だらうか」ミ云つて二度びつくりした。

「ブリギッタや、見ておいで、おぢいさんだつたら御禮を云ひたいから、ちよつ／＼うちに入つて下さい」お云ひ」

ブリギッタが出て見るミ、おぢいさんは丁度新しい厚い板を壁に打ちつけてゐる所だつた。ブリギッタはそばに歩みよつて、

「をぢさん、今日は、こんな御親切をして下さつて。お母さんも、わたしも本當に有難く思ひます。お母さんがお禮を申したいですつて。ほかに誰がそんな御親切をわたしにして下さる人がありません。本當にわたしたちは御親切を忘れは致し

「もうそれでいよよ。」をぢさんは遮つて「聞かなくたつて、お前たちがこのアルムのをぢをさう思つてゐるか位、分つてゐるよ。うちへお入り。直す場所は自分で見出せるから」

みんなが怖がるをぢさんにさう云はれたものだからブリギッタはすこくさうちに入つた。おぢいさんはその仕事を續けて、屋根の上にまで上つて方々直した。が、たうさう持つて來た釘も使ひ盡し、暗くもなつて來たので下に下りるを、殆ど同時位にハイディが出て來た。をぢさんはハイディを例の麻の袋に包んで抱き上げ、後に櫓を引きずりながら山を登つて歸つて行つた。

かうして長い間嬉しいことも變つたこともなく、毎日同じやうに暗い退窟な日を送つてゐたおばあさんにも、久しぶりに楽しい日が來た。この冬は毎日、おばあさんに何か楽しみにして待つものが出來た。夜があけるさ足音はしなやかき聞耳を立てる。戸のあく音がすれば子供が來てゐる。

それから子供の色々面白い話を聞いてゐるうちにいつの間にか日が暮れてしまふ。おばあさんは「まだ夕方にはならないかい」なきさいふ以前の言葉は忘れてしまつた。ブリギッタも「今日はお晝をぬいたやうね」さよく云つた。ハイディもおばあさんが大變好きになつて、さうさうおばあさんの目は誰にも直せないこまが分つた時にはひざく泣いて悲んだ。が、おばあさんは「ハイディちゃんが來てゐてくれるを、目の見えないこまなき忘れてしまふよ」さ云つて宥めた。

かうしてお天氣の好い日には必ずハイディが來た。おぢいさんも一度も反對しないで、ハイディを櫓で送つてくれた。それだけでなく、おぢいさんは櫓の中に槌やいろんな物を入れて來て、何度もこの山羊飼小屋の修繕をしてくれたのだつた。それで夜通し家ががた／＼ギ／＼／＼鳴るこまもなくなり、おばあさんはよく眠られるやうになつて「アルムをぢさんのして下さつたこまは決して忘れない」さ云ひ云ひした。

# 日本幼稚園協會編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校長 下村 壽  
 主幹 東京女子高等師範學校教授 倉橋 惣三  
 附屬幼稚園主事

## 日本幼稚園協會規則

- 第一條 本會ハ幼児教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児教育ニ篤志ナルモノトス
- 第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ケ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ
- 第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ
- 第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得
- 第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ  
 一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査  
 一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

- 會ノ開催  
 一、雜誌發行(毎月一回)  
 一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行  
 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介  
 一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク  
 會長 一名 會務ヲ總理ス  
 主幹 一名 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス  
 幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス  
 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ジ
- 第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ケ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應ジ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ
- 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザンハ變更スルコトヲ得ス

### 價定

一ヶ月分	金參拾五錢	特等面一頁	二等面一頁
半ヶ月分	金貳圓拾錢	一等面一頁	金貳圓拾錢以下
六ヶ月分	金貳圓拾錢	金拾五圓	御斷り
拾貳冊送	金四圓貳拾錢	神田區駿河臺ノ三品田	廣告社に御申込下さい

(外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい)  
 昭和十三年七月十三日印刷納本  
 昭和十三年七月十五日發行  
 幼兒の教育 第三十八卷 第七號

### 不許複製 禁止轉載

編輯 東京女子高等師範學校附屬幼稚園內  
 發行所 倉橋 惣三  
 印刷者 柴山 則常  
 東京市本郷區駒込林町百七十二番地  
 印刷所 鈴木 杏林 舎

### 發行所 日本幼稚園協會

東京市小石川區大塚町三十五  
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園內  
 振替口座東京一七二六六番

### 注 文 規 定

- 一、本誌御注文の方は凡て前金(郵税共)で願ひます。(郵券代用の場合は總て一割増)
- 一、御送金の場合はなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。
- 一、送金の節には第何巻第何月號より第何月號迄と明記せられたし。
- 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。
- 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帯封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。
- 一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

# 盛夏・暑休

健康保育、愉快に朗にすごす

お子達が歡ぶ保育用品の各種



- ◇園 扇——淡い紅・紫・黄・緑・水色の五種取合、何れも貼紙クレオン等で意匠して用ふ 十組 金三十錢
- ◇紙 舟——茶ボールに印刷した厚紙細工、剪つて開鉸で止め、クレオン・色テープ等で彩色してうかせる 十個 金二十五錢
- ◇風車用紙——一〇〇枚 金十二錢
- ◇金魚と風鈴 後藤牧星先生案 十組 金二十五錢
- ◇オランダの風車 後藤牧星先生案 十組 金十二錢
- ◇木 舟——木製のお舟、エナメルで仕上げ水に浮かせる 個 金十五錢
- ◇砂場用具——一號品・二號品の別あり一號品(バケツ・一合杓・木勦・新案杓子) 十組 金三十五錢
- 二號品(金屬製シヨベル・ホーレーキ・ホーク・板箕・篩) 十組 金二十錢
- ◇汽車とトンネル 丈夫な木製の二品 十組 金五十錢
- ◇撒水車 幼兒の爲め實用的工作 十組 金十五圓
- ◇砂場の交通機關 砂場用の汽車・電車・自動車等各五個宛 十組 金三圓五十錢

## 食館レヘーレフ 社會式株

番二六六三(33)話電・二町保神・田神・京東 社本  
 番七二八三(24)話電・五町後備・區東・阪大 店支  
 番八三九一(24)話電